



九州大学  
応用生理人類学  
研究センター一年報

|| 2016年度 ||

Physiological Anthropology Research Center  
Kyushu University  
Annual Report 2016

2016年度

# 応用生理人類学研究センター年報

III 応用生理人類学研究センター

PHYSIOLOGICAL ANTHROPOLOGY RESEARCH CENTER



## 目次

1. センター長挨拶 .....	1
2. 活動報告	
センター関連イベント報告	
・国際学生交流コロキウム .....	2
・Asia Symposium of Physiological Anthropology .....	3
・第6回講演会 .....	4
・第7回講演会 .....	5
・第8回講演会 .....	6
・レジリエンスデザイン研究会 及び ワークショップ .....	7
部門報告	
・環境適応研究部門 .....	8
・アクティブライフ部門 .....	10
・ヒューマニティ部門 .....	12
・レジリエンスデザイン部門 .....	14
3. 研究業績一覧 .....	16
4. 外部研究資金一覧 .....	24



センター長  
前田享史

## 応用生理人類学研究センター長挨拶

ごあいさつ

九州大学大学院芸術工学研究院 附属応用生理人類学研究センター（PARC）は、九州芸術工科大学設置以来、長年にわたり行われてきたヒトの生物学的適応に関する基礎研究を土台として、現代生活者が抱える様々な健康リスクを軽減し、ヒトが健康で快適に生活していくための応用研究を推進するために、2014年8月1日に設立されました。本報告書は発足から2～3年目にあたる2016年度の活動記録をまとめたものです。

現代日本人は洗練された人工環境に居住し生活しています。暑くも寒くも無い環境を24時間365日創り出すことができます。夜でも明るい環境を創り出すこともできます。これらの快適で便利な環境はヒトにとって本当に良い環境なのでしょうか？ヒトにとって良い環境とはどのような環境でしょうか？環境適応研究部門ではこれらの疑問をもって研究を進めて、適応的な環境や生活の提案を目指しています。アクティブライフ部門では、超高齢化社会における介護者の増加や老老介護などの諸問題に対して、それぞれの年齢層や障害の心身機能の特性を生理人類学的な視点から理解して人々をアクティブな生活へと導くことを目指しています。ヒューマニティ部門では現代社会における様々なストレスが人間性（ヒューマニティ）に与える影響について、人間性の進化適応的背景や発達メカニズムを基盤に、行動・生理・心理学的手法を用いて研究を進めています。ストレスによる歪みを跳ね返す力がレジリエンスです。レジリエンスデザイン部門では、レジリエンスを適切に発揮できるような場やモノを研究しています。

当センターにおける4つの部門はそれぞれの観点から研究を進めていますが、有機的に融合しつつ、未来の人類がよりよく生活できるような状態を目指しています。また、製品開発における基礎研究から付加価値の創出、災害避難所の運営や環境の改善、ヒト研究の深化などの産官学からの社会的要請に対して4部門の様々な専門領域の研究者で共同して対応しています。本報告書をご一読いただき、ご関心を持たれた方はセンター事務局までお知らせくださいますようお願いいたします。

## 2. 活動報告（センター関連イベント）

# 国際学生交流コロキウム 「Research Colloquium for Young Researchers 2016」

2016年9月2日（金）13:00~15:00、九州大学大橋キャンパス 312 教室

### 開催趣旨

本センターの構成員の一部は芸術工学府芸術工学専攻デザイン人間科学国際コース（博士後期課程）に所属している。当コースでは英語のみで学位が取得できるプログラムを提供している。毎年8、9月には本コースの国際的広報も兼ねたサマースクール（Summer School）を開催している。

本スクールでは、将来本コースに進学を検討している者に対して旅費および滞在費等を支援し、実際に国際コースの授業やラボワーク（研究室活動）を1~2週間体験する機会を提供している。参加者は主に東アジア圏（韓国、台湾など）、東南アジア圏（インドネシア、フィリピン、タイなど）の大学院修士学生や若手大学教員である。そして、センター構成員の研究室にもラボワークを受け入れている。

前年度と同様、応用生理人類学研究センターが主催となって、サマースクール参加者とセンター構成員の研究室研究員や学生が学術交流できる機会を設けた。双方が自身の大学や研究内容を英語にて紹介し、交流を深めた。

### 内容

Research Colloquium for Young Researchers 2016

日時：2016年9月2日（金）午後1:00～3:00

場所：九州大学大橋キャンパス 3号館 321 教室

### 参加者

サマースクール参加者7名（韓国3名、台湾1名、フィリピン1名、タイ1名、インドネシア1名）、九州大学関係25名（教員4名、学術研究員2名、国際コース在籍生6名、大学院生・学部生・研究生13名）

### プログラム

- 1) 応用生理人類学研究センターの紹介
- 2) 九州大学関係者による発表4件  
（学術研究員による発表1件、デザイン人間科学国際コース学生による発表1件、他大学院生2件）
- 3) サマースクール参加者による発表6件  
（生理人類学講座にてラボワークの者）



発表の様子



参加者の集合写真

## 2. 活動報告（センター関連イベント）

# Asia Symposium of Physiological Anthropology

2016年12月16日（金）、大橋サテライト・環境適応研究実験施設

### 開催主旨

日本生理人類学会では、生理人類学研究においてアジア各国との交流を促進するために、アジア各国からの研究者を招聘してアジアシンポジウムを主催した。本センターはシンポジウムを共催し、センター所属の研究者が多く参加し、また、シンポジウム後に環境適応研究実験施設の見学会を実施した。

### 内容

1. Association study of obesity with genetic variants among Malaysians, Dr. Yee-How Say (Universiti Tunku Abdul Rahman, Malaysia)
2. Zika virus infection in Malaysia, Prof. Kamruddin Ahmed (Universiti Malaysia Sabah, Malaysia)
3. Occupation and leptospirosis in Malaysia, Prof. Mohammad Saffree (Universiti Malaysia Sabah, Malaysia)
4. Quality Management Model at the Thai National Reference Laboratory, Dr. Vallerut Pobkeeree (Mahidol University, Thailand)
5. Work-related health problems of firefighters in Thailand, Prof. Surintorn Kalampakorn (Mahidol University, Thailand)
6. Brain-computer interfaces for human research, Prof. Sungphil Kim (Ulsan National Institute of Science and Technology, Korea)

7. Smartphone Usage Pattern and Its Biomechanical Impact, Prof. Gwanseob Shin (Ulsan National Institute of Science and Technology, Korea)
8. Spatial suppression in motion perception correlates with postural balance control, Prof. Oh-Sang Kwon (Ulsan National Institute of Science and Technology, Korea)
9. Seasonal variation of human thermogenesis under mild cold exposure, Dr. Takayuki Nishimura (Nagasaki University, Japan)

Excursion to Center of Environmental Adaptation research center (Prof. Takafumi Maeda, Kyushu University, Japan)



シンポジウムの様子



会議後の集合写真

## 第6回講演会

### 「被災地の環境と発育・睡眠に関する講演会」

黒川修行先生（宮城教育大学）

水野一枝先生（東北福祉大学）

2016年12月20日（火）13:50~、九州大学大橋キャンパス

---

#### 開催主旨

阪神淡路大震災、新潟中越地震、東日本大震災、熊本地震など、日本は様々な震災を経験している。震災による直接的な被害に加え避難所生活におけるストレスはわかりしれないものである。これらのストレスを軽減するためには、ストレスに抗う力（環境適応能・レジリエンス力）を高めることやこれらの能力をサポートするためのデザインが必要となる。災害によるストレスが成長発達や睡眠に及ぼす影響を検討することは、適応能やストレス軽減の観点から重要なことだろう。

以上のことから、当センターにおいて、「被災地の環境と発育・睡眠」と題して講演会を実施した。

#### 「データから見る東日本大震災前後の環境の変化と子どもの発育」

黒川修行先生（宮城教育大学）

黒川先生は、多くの共同研究者とともに仙台市の子どもの発育発達についての戦前からデータを収集しており、子どもの発育発達研究の専門家である。長年のデータのうち戦前戦後や東日本大震災前後のデータから、環境の変化やストレスから見た子どもの発育発達の変化について講演された。

#### 「被災地避難所の環境と睡眠」

水野一枝先生（東北福祉大学）

水野先生は光や温熱環境が睡眠に及ぼす影響を研究されており、睡眠環境の研究における第一人者である。睡眠に及ぼす環境要因の影響について、ご自身も被災された経験をも交えて講演された。

#### 意見交換会：「被災地避難所環境の問題点について」

講演会終了後、黒川先生、水野先生、当センターの環境適応部門およびレジリエンスデザイン部門の構成員で避難所環境の問題点について意見交換を行った。



講演会後の意見交換会

## 2. 活動報告（センター関連イベント）

### 第7回講演会

日本生理人類学会研究奨励発表会（九州地区）に引き続き特別講演会  
「チンパンジーの睡眠について」

座馬耕一郎先生（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

2017年2月11日（土）16:00~17:10、九州大学大橋キャンパス 511 教室

#### 開催主旨

進化の隣人であるチンパンジーの睡眠について知ることで、普段ヒトを対象として生理学的研究を行う研究者が新たな視点を得ることを目的とし、野生チンパンジーの眠りを研究する座馬耕一郎先生に、チンパンジーの睡眠や人類進化ベッドについて紹介していただいた。



枝葉で自作したベッドで寝る野生チンパンジー  
（タンザニア、マハレにて座馬耕一郎氏撮影）

#### 内容

チンパンジーなどの大型類人は毎日ベッドを作る。枝葉が積み重ねられた楕円形のチンパンジーのベッドは大変寝心地がよく、筋肉が弛緩した状態でも樹上から落ちてしまわないように作られているようだ。本講演では、チンパンジーの眠りに関して、フィールド調査で明らかとなってきた詳細や、ヒトの睡眠との共通点と相違点について、夜間の野生チンパンジーの貴重な映像も交えて分かりやすくお話しいただいた。夜中にトイレに起きたチンパンジーの行動など、ほほえましい場面の紹介では、会場に笑顔があふれた。

また、夜間の断眠はチンパンジーにも見られ、ヒトも近代以前は夜間に覚醒することが普通だったかもしれないという考察は、まとまった睡眠をとることをよしとする考えに議論を呼び起こすものであり、現代のヒトの眠りについて研究する上で意義深い内容であった。さらに、チンパンジーのベッドの寝心地のよさをヒントにして開発された人類進化ベッドを紹介いただき、基礎研究をデザインに活かすという観点からも、刺激的な講演であった。



講演会の様子

## 第8回講演会

### 「ヒトの脳血流調節の生理：統合的視点からの考察」

Can Ozan Tan 先生（Harvard Medical School, USA）

2017年3月27日（月）、九州大学大橋キャンパス

#### 開催趣旨

ヒトは体全体で消費するエネルギーの約20%を脳で消費している。(チンパンジーはその約半分である)。大きな脳を持つことで、ヒトは人間らしい知性や感性を手に入れることができたが、それを可能にするためには、それだけのエネルギーを必要としていることも事実である。脳がその機能を維持するためには、十分な酸素供給が必要であり、それを運搬しているのが血液である。しかしながら、脳の血流がどのように維持・調節されているかについてはまだ良くわかっていない。特に二足歩行を行うヒトは高い位置に脳があるため、立ちくらみによって貧血を起こさないように十分な血液を脳に送り込むことはとても重要なことである。

講演者の Tan 先生は、これまでハーバード大学でヒトの脳血流調節の生理に関する様々な実験を行い、その成果を数多く論文で発表されている。現在、千葉大学の石橋圭太准教授と共同研究をされている。石橋先生は2010年春まで本学の人間工学教室で助教をされていた。その当時に下半身陰圧負荷装置を工作工房で独自に製作し、現在もその装置を使って脳の血液循環について研究をされている。本講演は石橋先生の協力で実現した。

#### 講演題目

Physiology of Human Cerebrovascular Regulation: An Integrated Perspective

#### 内容

ヒトの高次脳機能は脳血管機能が基盤となっている。脳血管機能には、血中 pH の変化に対する血管反応性、神経細胞の代謝による局所的な反応（神経血管カップリング）、および全身性の血圧変化に対する反応（自動能）が知られており。これら脳血管機能と認

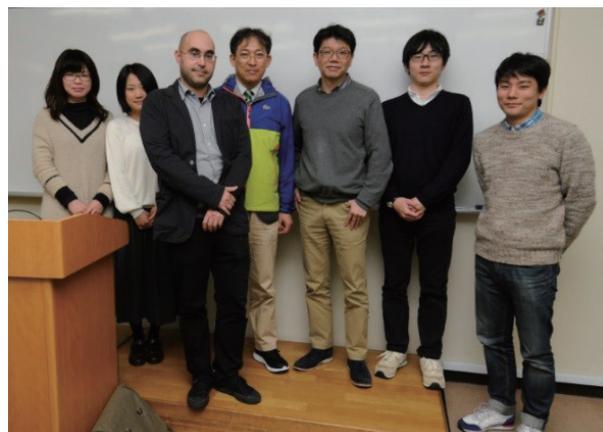
知機能との関連についても統合的な理解がなされつつある。講演では脳血流調節の生理について、統合的視点からの考察を行って頂いた。

講演後は環境適応研究実験施設の紹介を行った。特に人工的に気圧と酸素濃度を変えられることができる実験室 (No1) に強い関心を持たれ、今後はこの実験室を使った国際的な共同研究の検討を進めることになった。

#### 参考文献

Tan CO, Taylor JA: Integrative physiological and computational approaches to understand autonomic control of cerebral autoregulation. *Exp Physiol*. 99(1): 3-15. 2014.

Tan CO: Defining the characteristic relationship between arterial pressure and cerebral flow. *J Appl Physiol*. 113(8): 1194-200. 2012



講演会後に撮影した集合写真  
(左から3番目が Tan 先生、撮影は石橋先生)

## 2. 活動報告（センター関連イベント）

---

# レジリエンスデザイン研究会 及び ワークショップ

第1回 11/25, 第2回 12/16, 第3回 12/17, 第4回 12/28, 第5回 3/21、WS  
2/3, 2/8

---

レジリエンスデザイン部門では2016年度以下の研究会及びワークショップを行い専門家からのヒアリング・調査の検証及びワークショップを行った。（場所はいずれも九州大学大橋キャンパス1号館3F会議室）

### 第1回レジリエンスデザイン研究会

2016.11.25「避難所実態・支援実態・災害意識について」  
九州大学決断科学センター杉本めぐみ助教 九州大学 持続可能な社会のための決断科学センター 杉本めぐみ先生に東日本大震災を中心に世界各地での避難実態や避難状況、各国での防災行政等についてご講義頂いた。

また、レジリエンスデザイン部門における調査報告や実験計画に対しての意見交換を行った。

さらに次年度（2017年度）の防災に関わる教育プログラム・防災基幹教育授業について検討を行い、当該授業の遂行とカリキュラムの内容と実施が確認された。

### 第2回レジリエンスデザイン研究会

2016.12.16「避難経験の記録と記述」宮城教育大学 黒川先生准教授、東北福祉大学 水野先生准教授

宮城教育大学 黒川先生、東北福祉大学 水野先生に、センターの講演会開催当日、レジリエンスデザイン部門における研究の進捗状況に対しご講義・ご意見を頂いた。特に避難所における環境改善方法については、東日本大震災のご経験やその後のご活動に基づきアドバイスを頂き、その後のレジリエンスデザイン部門の研究に重要な示唆を頂いた。

### 第3回レジリエンスデザイン研究会

2016.12.17「移動体と未来協創予測と将来像」豊田中央研究所 向江秀之氏

豊田中央研究所 向江秀之氏から、技術の未来予想

についてのご講義を頂いた。将来の技術の可能性と人間にとっての技術の意味などについて、ご講義頂いた。

### 第4回レジリエンスデザイン研究会

2016.12.28「音環境と災害避難所、避難所での経験」  
福島大学永幡幸司准教授

レジリエンスデザイン部門における研究の進捗状況に対しご講義ご意見を頂いた。特に避難所における音環境の改善方法や東日本大震災や中越地震における避難所の具体的な問題について説明を頂いた。

### 第5回レジリエンスデザイン研究会

2017.3.21「災害復興とレジリエンス—行政実務の現場から」復興庁岩手復興局復興推進官 併 復興庁統括官付参事官付企画官 復興庁復興推進参与 末村裕子先生

東日本大震災における復興庁及び岩手県大槌町や岩泉町及び熊本県南阿蘇村における行政実務経験やその問題についてご講義を頂いた。また熊本市や福岡市・福岡県における課題、中央の防災行政の課題についての意見交換を行った。

### レジリエンスデザインワークショップ

2017.2.3「プロトタイピング（ハードウェア）検討ワークショップ」

行動変容・低侵襲調査・被災地ゴミ問題のプロトタイピングの検討発表・課題抽出を行った。

2017.2.8「プロトタイピング（ソフトウェア）検討ワークショップ」

避難行動・情報提供方法・情報アーカイブ方法などの問題に対する検討発表・課題抽出を行った。

これら具体的事例を通し、将来の社会実装に対する生理人類学・レジリエンスデザイン研究アプローチの確認ができた。

## 環境適応研究部門

### 講演会・発表会の開催

Asia Symposium of Physiological Anthropology :

平成 28 年 12 月 16 日に Asia Symposium in Physiological Anthropology を開催し、9 演題の研究発表と環境適応研究実験施設の見学ツアーを開催した。

マレーシア 3 名 (Universiti Tunku Abdul Rahman : 1 名, Universiti Malaysia Sabah : 2 名)、タイ 2 名 (Mahidol University : 2 名)、韓国 3 名 (Ulsan National Institute of Science and Technology (UNIST) : 3 名)

第 6 回応用生理人類学研究センター特別講演会 :

(2016 年 12 月 20 日、九州大学大橋キャンパス)

黒川 修行先生 (宮城教育大学) 「データから見る東日本大震災前後の環境の変化と子どもの発育」、水野一枝先生 (東北福祉大学) 「被災地避難所の環境と睡眠」

日本生理人類学会研究奨励発表会 :

日本生理人類学会とともに研究奨励発表会を企画し、平成 29 年 2 月 11 日に開催した。特別講演 1 演題、教育講演 2 演題、一般演題 : 10 演題

### 国際学会講演

15th International Symposium on the Science and Technology of Lighting (2016 年 5 月 22 日～ 27 日)

「Preventive effect of high correlated colour temperature LED light on light-induced melatonin suppression at night」の題目にて講演 (小崎智照)

20th Congress of the European Anthropological Association (EAA2016) (2016 年 8 月 24 日～ 28 日)

「The Effects of Morning and Night Lights on Phase Shift of Circadian Rhythm and Melatonin Suppression among Young Adults with Wide Range-Score of MEQ」の題目にて講演 (安河内朗)

「Individual Variation in Thermogenesis during Cold Exposure」の題目にて講演 (前田享史)

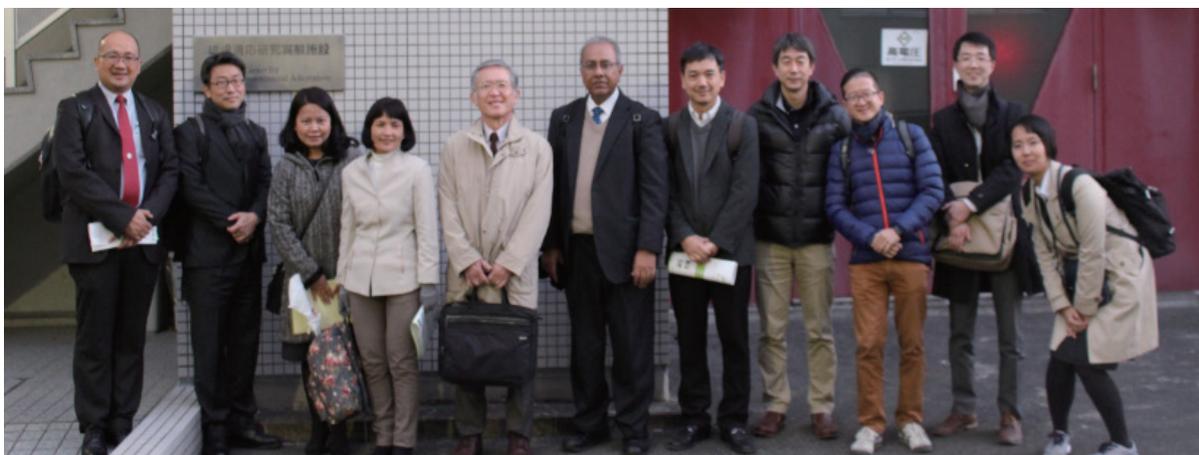
「Effects of flicker- and non-flicker-light on melatonin secretion at night」の題目にて講演 (小崎智照)

UNIST-JPA Joint Symposium 2016 on Anthropological and Physiological Research on Humans Living in Modern Society of East Asia (2016 年 9 月 22 日～ 24 日)

「Lighting Environment and Melatonin secretion」の題目にて招待講演 (小崎智照)



EAA2016 での生理人類学セッション座長 (Prof. Barbieri(左)と安河内センター員(右))



Asia Symposium of Physiological Anthropology 環境適応研究実験施設見学ツアー参加者

「Effect of Flicker Frequency of the Light on Melatonin Secretion」の題目にて講演（小崎智照）

The 5th International Conference on Human-Environment System (2016年10月29日～11月2日)

「Effects of relative humidity on secretory immunoglobulin A and cortisol in saliva」の題目にて講演（前田享史）

「Effects of different flicker frequency light on melatonin secretion」の題目にて講演（小崎智照）

#### 国内学会講演

日本生理人類学会第74回大会（開催日2016年10月22日～23日）

「異なる発光特性のLED光が瞳孔反応に与える影響」の題目にて講演（小崎智照）

#### 受賞（国内学会）

2016年度日本生理人類学会夏期セミナー優秀発表賞  
林政伸, 橋口暢子, 古賀弘子, 野中隆, 前川旭, 前田享史, 入浴前の寒冷刺激が入浴時の血圧変動に及ぼす影響, 2016年9月

人類動態学会西日本地方会第40回大会最優秀発表賞  
矢野雅人, 日高勇樹, 小崎智照, 高速フリッカー光と非フリッカー光によるメラトニン分泌抑制作用, 2016年12月

#### 国際共同研究

2013年度～2016年度, 「Assessment of postcranial indices, ratios, and body mass versus eco-geographical variables of prehistoric populations」:

Bloomsburg University, Pennsylvania USA と共同研究, (瀬口典子)

2016年度～2018年度, 「3D Data Acquisition in Bioarchaeology, Forensic Anthropology and Archaeological Contexts」:

Department of Anthropology and Social Science Research Lab, the University of Montana, Missoula, MT, USA; Lincoln Memorial University, DeBusk College of Osteopathic Medicine, USA; Anthropology, Faculty of Medicine, Albert-Ludwigs-University Freiburg, Germany と共同研究 (瀬口典子)

#### 国際共同研究のための海外企業への訪問

CoeLux社（ミラノ）（2017年3月14日）

世界に先駆けて疑似太陽光の照明器具を開発したCoeLux社（ミラノ）を訪問して、双方の研究紹介を行い、生理人類学的観点からの共同研究の可能性について意見交換を行った。その後、日本の代理店を通して共同研究の可能性を探り、2017年度以降に共同研究を始める予定となった。（安河内朗）



人工的な光散乱による青空と模擬太陽

Bartenbach社（インスブルック）（2017年3月16日）

世界をマーケットに自社開発の照明器具を展開するBartenbach社（インスブルック）を訪問して、双方の研究紹介を行った。生理人類学的観点からの共同研究の可能性について意見交換を行い、双方で相応しいファンドを探して申請するよう要請した。（安河内朗）

#### その他

##### 研究指導・研究相談

寒冷域における体表温と生理反応（製造業）（前田享史）

暑熱時の熱中症（私立総合病院・国立大学）（前田享史）

暖房方式と生体負担（住宅設備企業）（前田享史）

オフィス室内空気質と作業効率（建設企業）（前田享史）

##### 環境適応研究実験施設の紹介

2016年5月24日、九州大学ロンドンオフィス教員

2016年8月2日、海外協定大学教員

2016年8月30日、家電・住宅設備企業

2016年12月9日、海外協定大学教員

2016年12月16日、Asia Symposium in Physiological Anthropology 参加の海外研究者8名

2016年12月27日、九州大学他部局教員

2017年1月17日、海外協定大学教員

2017年1月26日、建設企業および住宅設備企業

2017年1月27日、住宅設備企業

## 2. 活動報告（部門）

### アクティブライフ部門

#### 部門研究会

##### アクティブライフ研究会（第2回）の開催

（開催日：2016年9月16日、会場：岡山県立大学）

障がい者や高齢者の運動、健康、生活、スポーツに関して研究している研究者、企業関係者および学生、計26名（国内から7機関）が集まり、研究成果や計画などの発表（13件）・ディスカッションを行った。また、研究施設見学、懇親会を行った。



アクティブライフ研究会の様子

#### 研究の成果・取り組み

##### 在宅高齢者の転倒予防に向けた実態調査（能登）

2017年2月～3月に、クリニック（飯塚市）に通院中の在宅高齢者33名を対象に、住環境の問題点、日常生活動作を行う際の感覚・運動機能の認識調査を行った。また、運動機能や末梢血流の測定も実施した。転倒の非接触型高精度・高速検出センサの開発（大草）従来では装着タイプのものであった室内転倒検知について、非接触型電波センサによる統計的手法を用いた高精度転倒（検知精度96%）システムを開発した。高齢者の転倒見守りシステムへの展開が期待できる。

#### 講演・イベント関係

##### 第14回「聴覚障害とその補償に関する情報交換会」(白石)

（実施日：2016年9月24日、会場：九州大学大橋キャンパス5号館511教室）参加者71名

（実施日：2016年12月10日、会場：九州大学大橋キャンパス5号館511教室）参加者100名

本学学生による外国論文紹介3題、九州工業大学大学院生より研究紹介3題、音支援に関するメーカーからの製品紹介2題、九州工業大学の中藤良久教授より特別講演があり、教育関係者や医療関係者、音響研究者から活発な質疑応答がなされた。

第15回「聴覚障害とその補償に関する情報交換会」(白石)

（実施日：2016年12月10日、会場：九州大学大橋キャンパス5号館511教室）参加者100名

本学学生と福岡大学大学院生による研究紹介3題、音支援に関するメーカーからの製品紹介2題、本学の鏑木時彦教授より特別講演があり、教育関係者や医療関係者、音響研究者から活発な質疑応答がなされた。



聴覚障害とその補償に関する情報交換会の様子  
（上：第14回、下：第15回）

記念講演会「聴覚障がいを取り巻く最近の動向」(白石)  
(実施日:2017年3月18日、会場:九州大学大橋キャンパス5号館511教室)参加者150名

医学、教育、工学のそれぞれの分野の第一線で活躍されている4名の研究者・教育者から、「聴覚障がい」に関する最近の動向について計2時間の講演があり、多くの参加者が充実した講演に聴き入っていた。

招待講演「センシングデータの統計解析」(大草)

日本統計学会春季大会(2017年3月5日)の特別セッション「Industry 4.0時代におけるIoTとセンシングデータ」にて招待講演

グッドウォーキング教室(村木)

2016年10月~12月に計5回開催(会場:大橋キャンパス体育館)。地域高齢者18名に対して歩行能力を高めるための運動指導を行った。また、下肢の筋量や歩行フォームの評価も実施した。



記念講演会の様子



グッドウォーキング教室の様子

地域住民を対象とした筋年齢測定会(村木)

- 福岡市早良保健所(健康まつり)(実施日:2016年10月6日(木)、会場:福岡市早良保健所)
- 福岡市早良区曲渕校区(実施日:2016年6月6日(月)、11月11日(金)会場:福岡市早良区曲渕公民館)

- 福祉人間工学研究室主催(実施日:2016年3月27日、会場:九州大学大橋キャンパス体育館)

受賞

学会発表(国内大会)

- 日本人間工学会九州・沖縄支部第37回支部大会優秀発表賞  
新飼伸崇,中島弘貴,村木里志.靴の重さの違いが歩行モーションに与える影響.(2016年10月)
- 日本生理人類学会第73回大会優秀発表賞  
中島弘貴, Loh Ping Yeap, 田中颯, Irma Nur Afiah, 村木里志.20歳代から80歳代にかけての歩行モーション変化.(2016年6月)
- 人類動態学会西日本地方会第41回大会優秀発表賞  
立野謙太,村木里志.腕操作面型デバイスの保持位置の違いが首部に与える影響.(2016年12月)

国際交流

大学間・部局間協定校との交流

- インドネシア、セベラスマレット(Universitas Sebelas Maret)芸術デザイン学部にて特別講演、ワークショップ開催(2016年11月3~4日)(村木)
- インドネシア、バンドン工科大学(Institut Teknologi Bandung)を視察訪問(2016年12月30日)(村木)
- 中国、武漢理工大学芸術設計学部にて特別講演、集中講義(福祉人間工学)(2017年12月7~9日)(村木)
- タイ、マヒドン大学(Mahidol University)公衆看護学部、理学療法学部を視察訪問(2017年3月13~14日)(村木)
- タイ、チュラーロンコーン大学(Chulalongkorn University)工学部ヒューマンファクター・人間工学研究室を視察訪問(2017年3月15日)(村木)

海外大学との共同研究

- Oticon (Denmark): Evaluation the hearing aid's feature : (1) Effect of the adaptive time constants for the transient noise, (2) Effect of the new type noise reduction system under the difficult sound environment with the multiple speech (2016年9月~2017年3月)(白石)

## 2. 活動報告（部門）

### ヒューマニティ部門

#### 個別研究概要

##### 1. 子どもの睡眠や生体リズムに関する研究

###### 【科研費 基盤研究 A（樋口）】

夜の人工照明は私たちの生活を便利にする反面、睡眠や生体リズムを夜型化させている。私たちのこれまでの研究で、子どもは大人以上に光の影響を受けやすいことが分かってきた。しかし、そもそも人工照明がなかったら子どもの概日リズムはどうなるのかがわかっていない。そこで、人工照明の少ない自然の中でのキャンプ生活が子どもの睡眠や概日時計にどのような影響をおよぼすかについて調査を行った。30泊31日夏のガキ大将キャンプ（ハローウッズ主催）（栃木県、茂木町）に参加する小学生と中学生21名について、キャンプ前とキャンプ中の睡眠習慣、概日リズムの位相、光曝露履歴などを調べ、現在その結果をまとめている。写真は木に囲まれたキャンプサイトの様子を示している。



##### 2. 曲面ディスプレイに提示された顔表情認知に関する研究

###### 【共同研究：大日本印刷株式会社（樋口）】

有機ELを用いた曲がるディスプレイが開発されているが、曲面に映し出される映像がヒトの認知機能に及ぼす影響はよくわかっていない。本研究では、曲面ディスプレイに映し出されたヒトの顔表情認知について、心理物理学的な方法を用いた表情判別課題や、顔

表情の知覚に関連する脳波を用いて、その特徴を明らかにしている。写真は、曲面に写しだされた顔画像を見ている時の脳波を測定している様子（実際の実験では目を出した写真を使用している）。



##### 3. 高齢者の介護予防コミュニティ形成を支援するオンラインゲームデザイン研究

###### 【科研費 基盤研究 A（松隈）】

研究協力先である長尾病院と共同で開発した半側空間無視訓練用ゲーム「たたけ！バンバン職人」の検証発表をCEDECC2016にて行う。また、高齢者へのデジタルゲームを実際に利用する場を作るため、2014年秋から「ロコモ運動サークル」を開講し、大学内にて月2回のペースで継続、実施している。同時に、更なる普及の為近隣高齢者施設へ開発ゲームの貸し出しも積極的に行っている。



#### 4. 遺伝的な色覚の多様性が感性の個人差に与える影響

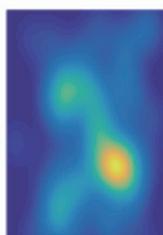
##### 【科研費 若手研究 B (平松)】

ヒトには遺伝的背景による色覚の多様性が存在するため、同じ景色を見ても注意を向ける箇所や印象が人間で同質とは限らない。昨年度に引き続き、様々な色覚を持つ参加者を対象とし、絵画鑑賞中の視線行動や絵画に対する印象の個人差を調べる実験をおこなった。その結果、1) 視線行動は色覚型や画像の特徴を反映していること、2) 色覚の違いは色彩印象の個人差に大きく影響すること、3) 長期間の色覚経験も印象に反映されていること、などが明らかとなった。これらのことは、先天的な要因が後天的な要因とも相互作用しながら、多様な行動様式や感性を作り出していることを示しており、色覚特性に配慮したデザインの制作に活かされることが期待される。図は、鑑賞した絵画に対する2色型色覚と3色型色覚の視線行動の違いを表す(視線マップの明るい部分: 視線が集中した箇所)。

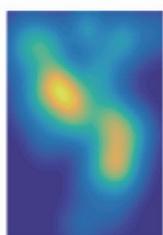
鑑賞した画像



視線マップ



3色型色覚



2色型色覚

#### その他の活動

・九州大学橋彌研究室 研究・プロジェクト  
赤ちゃん研究員 <http://www.babykyushu.org/>

・お母さんの文化祭 (金)

日時: 平成 28 年 11 月 27 日 (日)

場所: 九州大学大橋キャンパス多次元実験棟

内容: 重度の障がい児を持つお母さんのための文化祭を実施

#### 講演会

1. 感覚間一致の比較認知科学 (足立幾磨先生・京都大学霊長類研究所) (2017 年 2 月 21 日) (橋彌)

成績や順位が「高い・低い」、声が「明るい・暗い」などの表現は日常的に特に意識することなく使われています。しかし、考えてみれば、「高い・低い」といった本来空間情報を表す言葉がものの順序を表す際につかわれたり、「明るい・暗い」という明度を表す言葉が音声を表す際に使われたりするの不思議です。こうしたメタファー的な表現は、ヒトが異なる感覚間にある種の一致性(感覚間一致)を知覚していることを反映しているためだと考えられています。このような一致性を「感覚間一致」と呼びます。本講演ではこうした「感覚間一致」の、ひいては、言語の進化的な起源を探る講演者の試みについて紹介をしました。

#### 受賞関連

日本睡眠学会第 41 回定期学術集会ベストプレゼンテーション賞, 李相逸, 松森孝平, 西村佳菜, 許慧敏, 津山卓也, 樋口重和. LED 照明の色温度と年齢の違いが夜間のメラトニン分泌と眠気に及ぼす影響. 2016 年 7 月

日本生理人類学会第 74 回大会優秀発表賞, 池田悠稀, 西村悠貴, 樋口重和. 感情プライミング効果と個人の情動伝染特性の関連. 2016 年 10 月

## レジリエンスデザイン部門

2016年4月の熊本地震発災以降レジリエンスデザイン部門では、避難所におけるレジリエンスデザインの方法を検討してきた。さらにJST-RISTEX平成28年度戦略的創造研究推進事業（社会技術研究開発）「問題解決型サービス科学研究開発プログラム」「未来を共創するサービス研究開発の可能性調査」の採択を受け、「未来の安心のための災害避難所に関するレジリエンスアシストサービス実装の可能性調査」を中心にやってきた。

本年報についてはその報告を行う。（その他の研究については個人の報告もしくは部門の研究リストを参考にされたい。）

### 1. 研究の概要

本可能性調査（以下FS）では今後確実に発生する災害に耐え、災害後の未来設計を迅速化させるためのサービス科学とサービスデザインの方法の有効性を避難所における居住環境・人口移動・医療衛生の3つの視点から調査した。調査はエスノグラフィー・ヒアリング調査・アンケート調査・模擬実験とした。その結果、避難所をヒトの生物学的特性を重視した生活環境に予め整えておくことが重要であること、被災者の急性および慢性ストレスの程度を数値化しチェックできること、事前期待を数値化できることを示した。また、レジリエンスを高めるためのサービス人材を育成することが重要であることを指摘した。これらを社会実装するために福岡都市圏を核として九州およびアジア地域の経済界・産業界と繋がりが深い福岡地域戦略推進協議会との連携基盤を作った。

### 2. レジリエンスアシストサービスの定義

被災後の急性ストレス反応を最小限にすべくストレス除去や事前準備を行うことを第1のレジリエンスアシストと定義した。

避難所での慢性ストレス反応を最小限に抑え、社会復帰を促す心身の状態が確保されるように支援することを第2のレジリエンスアシストと定義した。第1・第2のレジリエンスアシストを日常の生活で発生するストレス対策に用いることでストレスを緩和させるこ

とができるのであればレジリエンスアシストサービスは日常時にも有用性が高いという考えから研究を進めた。

### 3. 研究の実施内容・方法

ステークホルダーの遷移やその人々の行動実態を把握するために、サービス学やデザイン学の基本に則り、ヒアリング、アンケート、エスノグラフィーを実施した。また、それらから導いた仮説に基づく模擬実験(図1, 2, 3)の手法を検討した。さらに、脳活動、共感に関するオキシトシン受容体遺伝子多型、共感性や調和性等の性格特性値を用いて事前期待を数値化すること(図4)を試みるために、多数の被験者を用いて検討した。



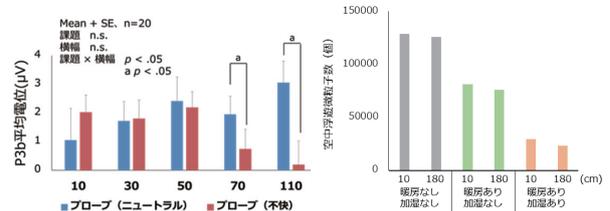
図1. 至適横幅検討実験の風景（写真左）



図2. 至適温湿度検討実験の風景（写真右）



図3. 慢性ストレスを引き起こす避難所の社会的環境



さらに、共通的事前期待と避難所場面に対する良い事前期待（正の事前期待）、悪い事前期待（負の事前期待）それぞれの事前期待について、解析の結果、下記のような予測式が得られた。これら予測式によって、遺伝特性や性格特性および脳波を用いると、その人のサービスに対する事前期待の度合いが予測でき、オーダーメイド型サービスの提供可能性が示唆された。

避難所生活でのサービスの正の事前期待の予測式 (R<sup>2</sup>値 = 0.12) : \*

$$Z = -0.46 \times \text{男性} - 0.85 \times \text{GA} - 0.43 \times \text{GG} - 0.36 \times \text{誠実性} + 0.18 \times \text{開放性} - 0.53 \times \text{調和性} + 0.33 \times \text{外向性} - 0.29 \times \text{情緒不安定性} + 0.61 \times \text{行動制御系} - 0.51 \times \text{行動賦活系} + 17.34 \times \text{駆動} + 16.12 \times \text{報酬反応性} + 17.21 \times \text{刺激探求} + 0.83 \times \text{視点取得} + 0.43 \times \text{個人的苦悩} + 53.47 \times \text{BAQ:all} - 14.21 \times \text{身体的攻撃} - 11.46 \times \text{短気} + 13.50 \times \text{敵意} + 13.33 \times \text{言語的攻撃} + 0.42 \times \text{STAI} - 1.48 \times \text{所属欲求} + 0.63 \times \text{賞賛獲得要求} + 0.63 \times \text{拒否回避要求}$$

避難所生活でのサービスの負の事前期待の予測式 (R<sup>2</sup>値 = 0.42) : \*

$$Z = -1.06 \times \text{男性} - 0.28 \times \text{GA} - 0.24 \times \text{GG} - 0.55 \times \text{開放性} - 0.53 \times \text{調和性} - 0.24 \times \text{外向性} + 69.35 \times \text{行動賦活系} - 23.5 \times \text{駆動} - 22.95 \times \text{報酬反応性} - 23.42 \times \text{刺激探求} - 0.67 \times \text{空想} - 67.14 \times \text{BAQ:all} + 16.83 \times \text{身体的攻撃} + 16.89 \times \text{短気} + 16.40 \times \text{敵意} + 16.84 \times \text{言語的攻撃} + 0.79 \times \text{STAI}$$

図 4. 事前期待の予測式

災害時において、ストレスによる最大の侵襲は生命維持の危機である。そのため救命の最適化を目指し、行政や医療機関のシステム構築をはじめ、様々な対策が講じられている。一方で、被災による生活環境の変化や個々の抵抗力の違いが被災者の心身に及ぼす影響については、データの集約・蓄積が十分でなく、検討や対策が十分でない現状にある。各地で大災害発生のリスクの高い本国においては、災害関連死や新規のストレスの発生による心身の不調、意欲の減退などを抑制するためのレジリエンスアシストサービス (図5) の確立は喫緊の課題である。医療・衛生グループでは、前述のアンケートを用いた被災者の心身の健康に関する経験の分析、ヒアリングを用いた支援者側の経験の分析から、災害時の心身の健康維持に必要なアシストを抽出し、災害時・平時ともにレジリエンス力の向上を目指したサービス展開の枠組みを検討した。

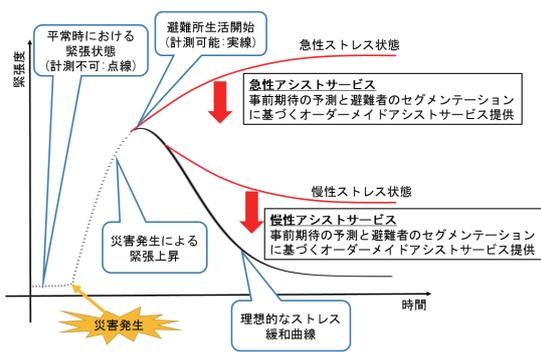


図 5. ストレスチェックとレジリエンスアシストの関係

#### 4. 考察・結論

以上より、生理人類学におけるレジリエンスデザインとして以下の5つの方向性が抽出できた。「災害に備えた生活環境の整備」、「ストレスチェックシステム」、「事前期待」、「人材育成」、「サービス主導性」(図6, 7, 8)である。

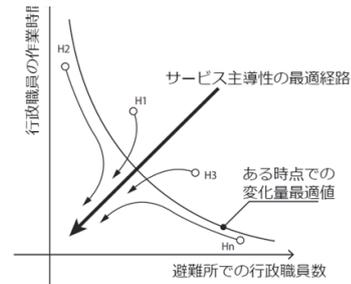


図 6. サービス主導性の数理的概念図

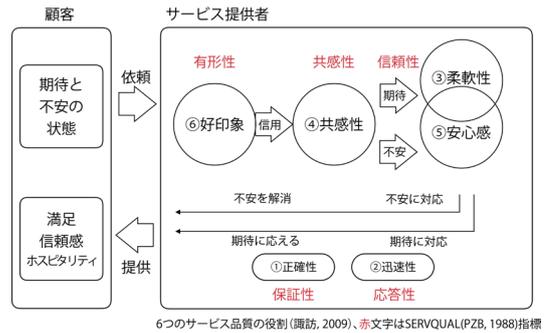


図 7. サービス品質と SERVQUAL

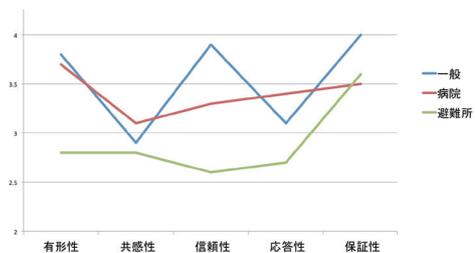


図 8. 負の事前期待と外形性・信頼性

この研究成果を活かし、次年度以降、本取組をより良いプロジェクト研究としていくため、社会実装の可能性を追求するために行政や企業と連携を強めていく。

さらに、福岡の新しい将来像を描き、地域の国際競争力を強化するために、地域の成長戦略の策定から推進までを一貫して行い、産学官民一体化し福岡地域戦略推進協議会との連携を継続する。

特に実証実験や社会実装においての実績が多数ある福岡地域戦略推進協議会との具体的な連携は福岡都市圏を核として、九州、さらには隣接するアジア地域との連携につながり、事業性のあるプロジェクトの推進をめざす。

本研究で見出した実験方法は、先に述べた直接的な実験成果の他にサービス科学の方法論を構築していく上で重要となる。住民や企業の活力にもなるサービス科学の実験自体をプラットフォームとして構築することが、サービス科学・サービス産業の発展に繋がるといった可能性を生理人類学より抽出した。

### 3. 研究業績

## 構成員研究業績一覧 (2016年)

#### 安河内朗

##### 【論文】

田中冨季、謝倩、矢野峻朗、犬塚優、田尻弘範、安河内朗：混色光の分光分布と短波長成分が夜間メラトニン分泌に及ぼす影響。日本生理人類学会誌、21(4):151-158, 2016

(Saki Tanaka, Qian Xie, Toshiro Yano, Yuu Inuzuka, Hronori Tajiri and Akira Yasuouchi: Effects of spectrum composition and short-wavelength components of polychromatic light on nocturnal melatonin suppression. Jpn J Physiol Anthropol:151-158, 2016)

大塚優希、山下徳南美、安河内朗：月経周期による女性の皮膚温度感受性の変化および空調環境への応用。日本生理人類学会誌、21(4):141-150, 2016

(Yuki Otsuka, Honami Yamashita and Akira Yasukouchi: Changes in the skin thermosensitivity with the menstrual cycle and applications to women in air-conditioned environments. Jpn J Physiol Anthropol:141-150, 2016)

Chien-Chun Lu, Chinmei Chou\*, Akira Yasukouchi, Tomoaki Kozaki, and heng-Yi Liue: Effects of nighttime lights by LED and fluorescent lighting on human melatonin Journal of Ambient Intelligence and Humanized Computing, Journal of Ambient Intelligence and Humanized Computing, DOI 10.1007/s12652-016-0383-2, 2016

謝倩・魏思瑤・田中冨季・戸田直広・安河内朗：作業効率と覚醒水準の逆U字関係から評価されたオフィスにおける適切な照明条件、日本生理人類学会誌、21(2)：41-50, 2016

(Qian Xie, Siyao Wei, Saki Tanaka, Naohiro Toda and Akira Yasukouchi: Appropriate lighting conditions in offices – Evaluated from the relationship between performance and arousal level. Jap J Physiol Anthropol:41-49, 2016)

#### 前田享史

##### 【学会発表】

###### < 国際発表 >

Maeda T, Hayashi M, Individual Variation in Thermogenesis during Cold Exposure, 20th Congress of the European Anthropological Association, Croatia, Aug 2016

Maeda T, Takayashiki R, Effects of relative humidity on secretory immunoglobulin A and cortisol in saliva., The Fifth International Conference on Human-Environment System, Japan, Nov 2016

###### < 国内発表 >

鶴岡 祥太, 前田 享史, 運動前の気温が暑熱下運動時の生理反応に及ぼす影響, 平成 28 年度 日本生理人類学会研究奨励発表会 (九州地区), 2017 年 2 月

林 政伸, 橋口暢子, 古賀 弘子, 野中 隆, 前川 旭, 前田 享史, 入浴前の寒冷刺激が入浴時の血圧変動に及ぼす影響, 2016 年度日本生理人類学会夏期セミナー, 2016 年 9 月

##### 【その他】

###### < 受賞 >

2016 年度日本生理人類学会夏期セミナー優秀発表, 林 政伸, 橋口暢子, 古賀 弘子, 野中 隆, 前川 旭, 前田 享史, 入浴前の寒冷刺激が入浴時の血圧変動に及ぼす影響, 2016 年 9 月

#### 小崎智照

##### 【論文】

Lu CC, Chou C, Yasukouchi A, Kozaki T, Liu CY. Effects of nighttime lights by LED and fluorescent lighting on human melatonin. Journal of Ambient Intelligence and Humanized Computing, 7(6), 837-844, 2016

##### 【学会発表】

###### < 国際発表 >

Kozaki T, Taketomi R, Hidaka Y, Ide N, Yasuda T. Preventive effect of

high correlated colour temperature LED light on light-induced melatonin suppression at night. 15th International Symposium on the Science and Technology of Lighting, Japan, May 2016

Kozaki T, Katami K, Takakura J, Kusano Y. Effects of flicker- and non-flicker-light on melatonin secretion at night. 20th Congress of the European Anthropological Association, Croatia, Aug 2016

Kozaki T. Lighting Environment and Melatonin secretion. UNIST-JPA Joint Symposium 2016 on Anthropological and Physiological Research on Humans Living in Modern Society of East Asia, Korea, Sep 2016

Hidaka Y, Kozaki T. Effect of Flicker Frequency of the Light on Melatonin Secretion, UNIST-JPA Joint Symposium 2016 on Anthropological and Physiological Research on Humans Living in Modern Society of East Asia, Korea, Sep 2016

Kozaki T, Katami K, Arata T, Takakura J. Effects of different flicker frequency light on melatonin secretion. The 5th International Conference on Human-Environment System, Japan, Oct 2016

###### < 国内発表 >

日高勇樹, 小崎智照, 高倉潤也, 草野洋介. 異なる発光特性の LED 光が瞳孔反応に与える影響. 日本生理人類学会第 74 回大会, 2016 年 10 月

#### 瀬口典子

##### 【著書】

瀬口典子、シュミット・W・ライオン. 皮膚色と頭蓋骨形態からみたヒトの多様性 (pp.215-242). 人種神話を解体する、V2 科学と社会の知 (竹沢泰子、坂野徹編)、東京大学出版会、2016. 11 月

##### 【論文】

Schmidt RW, Seguchi, N. Craniofacial variation of the Xiongnu nomads of Mongolia reveals their possible origins and population history. Quaternary International, 405, 110-121, 2016

##### 【学会発表】

###### < 国際発表 >

Seguchi N. and Quintyn C. A Craniofacial and Postcranial Survey of North and South American Inhabitants from the Perspective of Possible Old World Ancestors. In Session: Hunter-gatherer mobility and exchange during primary and secondary dispersals. The Eighth World Archaeological Congress, Kyoto, Japan, August 28-September 2, 2016

Seguchi N, Murphy M.M, Yonemoto S, and Dudzik B. Practical reality of taking semilandmark data on archaeological human remains. The 85th Annual meeting of American Association of Physical Anthropologists, Atlanta. GA USA, April 13-17, 2016

###### < 国内発表 >

瀬口典子、マーフィー M.M. 考古学的人骨からセミランドマークデータを収集する際の現実的な問題とその解消。第 70 回日本人類学会大会、新潟、2016 年 10 月

#### 白石君男

##### 【論文】

Fujihira H, Shiraishi K, Gerard R. Elderly listeners with low intelligibility scores under reverberation show degraded subcortical representation of reverberant speech. Neuroscience Letters, 637:102-107, 2017

Kodera K, Hosoi H, Okamoto M, Manabe T, Kanda Y, Shiraishi K, Sugiuchi T, Suzuki K, Tauchi H, Nishimura H, Matsuhira T, Ishikawa K. Guidelines for the evaluation of hearing aid fitting (2010). Auris Nasus Larynx, 43: 217-228, 2016

Murakami T, Shiraishi K, Nakagawa T. Classification of noise and environmental stimuli by the auditory impression of cochlear implants users. Medical bulletin of Fukuoka University, 43:17-26, 2016

【学会発表】

< 国際発表 >

Ifuku Y, Shiraishi K. Effects of attack times and release times in compression amplification on Japanese speech perception. Youngnam-Kyushu Joint Conference on Acoustics 2017, Pusan, Feb 2017

Shiraishi K, Nakamura K, Oikawa Y, Ueda M. The activities of the research committee on "Oto barrier-free" of the Acoustical Society of Japan, 5th Joint Meeting Acoustical Society of America and Acoustical Society of Japan, Hawaii, Dec 2016 (Invited)

Fujihira H, Shiraishi K, Remijn G. Auditory brainstem responses to anechoic and reverberant two-syllable speech sounds in elderly listeners, 5th Joint Meeting Acoustical Society of America and Acoustical Society of Japan, Hawaii, Dec 2016

< 国内発表 >

白石君男. 聴覚障害者の語音聴取に及ぼす室内音響とその評価, 日本音響学会九州支部総会, 2017年3月(招待講演)

白石君男. 技術動向レビュー「コミュニケーションを支える技術 - 音バリアフリーと人工知能 -」, 日本音響学会 2017 春季研究発表会, 2017年3月(招待講演)

内田匠, 白石君男, 藤平晴奈. 雑音下における子音弁別成績と聴性脳幹反応との関連性, 日本音響学会 2017 春季研究発表会, 2017年3月

村上健, 白石君男, 塚原恵, 永田里恵, 中川尚志. 人工内耳装用者における雑音および環境騒音の聴覚的印象評価結果の検討, 第61回日本音声言語医学会, 2016年11月

白石君男, 新井杜人. オープンフィッティング補聴器が日本語の理解に与える影響, 日本聴覚医学会 第39回補聴研究会, 2016年10月

藤平晴奈, 白石君男. 高齢者のノイズ下における音声聴取成績と周波数対応反応との関連性, 第61回日本聴覚医学会, 2016年10月

白石君男, 和田牧子, 大橋節子. 適応型時定数の圧縮増幅が難聴者の日本語聴取に及ぼす影響, 第61回日本聴覚医学会, 2016年10月

居福良紀, 白石君男. 圧縮増幅の時定数が日本語の音声知覚に及ぼす影響, 日本音響学会 2016 年秋季研究発表会, 2016年9月

白石君男, 泉春名, 内田匠, 藤平晴奈. 音声刺激に対する聴性脳幹反応の加算回数に関する検討, 日本聴覚医学会第11回 ERA・OAE 研究会, 2016年7月

内田匠, 白石君男, 藤平晴奈. 雑音下における音声聴取成績と聴性脳幹反応についての検討, 日本聴覚医学会第11回 ERA・OAE 研究会, 2016年7月

山本洸, 白石君男, 藤平晴奈. 同側・対側・両側耳への雑音負荷が聴性脳幹反応に及ぼす影響, 日本聴覚医学会第11回 ERA・OAE 研究会, 2016年7月

村木里志

【論文】

Purwaningrum L, Loh PY, Muraki S. The effectiveness of an elementary school chair design to ensure ease of mobility. International Journal of Technology, 8(2): 238-249, 2017

Lurwaningrum L, Funatsu K, Rosyidi CN, Muraki S. Considering children's methods of grasping and carrying elementary school chairs for easy carrying, lifting, and turning. SAGE Open, 7: 1-7, DOI: 10.1177/2158244016678037, 2017

Rosyidi CN, Hermayanti I, Laksono PW, Purwaningrum L, Susmartini S, Muraki S. Desk and chair design of elementary school using kansei engineering and conjoint analysis. Journal of Engineering and Applied Sciences, 11(11):2514-2519, 2017

Loh PY, Nakashima H, Muraki S. Effects of grip force on median nerve deformation at different wrist angles. Peer J, 4: e2510, 2016

能登裕子, 村木里志. 介助負担と乗り心地を考慮した車いす段差乗り上げ介助操作の姿勢指標. 日本看護技術学会誌, 15(2): 135-145, 2016

立野謙太, 横田知明, Ping Yeap Loh, 村木里志. 若年者と高齢者の運動学習に伴う筋電図表出の違い. 日本生理人類学会誌, 21(3): 107-113, 2016

Xiong J, Muraki S. Thumb performance of elderly users on smartphone

touchscreen. SpringerPlus, 2016:1218 DOI: 10.1186/s40064-016-2877-y, 2016

Afiah IN, Nakashima H, Loh PY, Muraki S. An exploratory investigation of changes in gait parameters with age in elderly Japanese women. SpringerPlus, 2016:1069 DOI: 10.1186/s40064-016-2739-7, 2016

齋藤誠二, 村木里志. 長時間歩行および立位姿勢中の下肢のむくみに起因する不快感に関する研究. バイオメカニズム学会誌, 40(2):121-129, 2016

【学会発表】

< 国際発表 >

Loh PY, Muraki S. Morphological changes in the median nerve at the wrist after prolonged keyboard typing: An exploratory study. 4th SEANES International Conference on Human Factors and Ergonomics in South-East Asia, Indonesia, Nov 2016

Purwaningrum L, Loh PY, Muraki S. The effectiveness of the proper shape and holding positions of the elementary school chair to encourage the student transporting a chair easily. 4th SEANES International Conference on Human Factors and Ergonomics in South-East Asia, Indonesia, Nov 2016

Afiah IN, Nakashima H, Loh PY, Muraki S. Changes in joint angle behavior with age during walking in Japanese women. 4th SEANES International Conference on Human Factors and Ergonomics in South-East Asia, Indonesia, Nov 2016

Muraki S, Nasir N, Hayashi K, Loh PY. Human physiological adaptation to assistive technology. Unist-JPA Joint Symposium 2016, South Korea, Sep 2016

Nakashima H, Loh PY, Tanaka H, Afiah IN, Muraki S. Effects of aging on lower extremity motion during gait. Unist-JPA Joint Symposium 2016, South Korea, Sep 2016

Loh PY, Nakashima H, Muraki S. Differences of the median nerve between young and older adults: a perspective from ultrasonographic examination. Unist-JPA Joint Symposium 2016, South Korea, Sep 2016

Muraki S, Nakashima H, Matsuguma H. Effectiveness of an exercise class using a serious game for preventing the locomotive syndrome in among the elderly. The 10th World Conference of Gerontechnology, France, Sep 2016

Fukuda O, Shimizu T, Okumura H, Arai K, Muraki S, Fukumoto K. Analysis of thigh cross-sectional proportion using the portable ultrasound imaging system. 2016 IEEE 18th International Conference on e-Health Networking, Applications and Services (Healthcom), Germany, Sep 2016

Herrera Cadillo LR, Satoh T, Nagasawa A, Ohkura M, Fukuzawa R, Muraki S. Awareness and prevention of repetitive strain syndromes of the hand and wrist during infant care. The ICM Asia Pacific Regional Conference 2015, Japan, July 2016

< 国内発表 >

阮至廷, LOH Ping Yeap, 村木里志. 押し動作における荷重の急変化に対する姿勢変化. 人類動態学会西日本地方会第41回大会, 2016年12月

立野謙太, 村木里志. 腕操作面型デバイスの保持位置の違いが首に与える影響. 人類動態学会西日本地方会第41回大会, 2016年12月

中島弘貴, Irma Nur Afiah, Loh Ping Yeap, 村木里志. 生活習慣・環境の違いが高齢者の歩容に与える影響. 日本生理人類学会第74回大会, 2016年10月

新飼伸崇, 中島弘貴, 村木里志. 靴の重さの違いが歩行モーションに与える影響. 日本人間工学会九州・沖縄支部平成28年度第37回支部大会, 2016年10月

能登裕子, 村木里志. 車いすのティッピングレバー形状が車いすの軌跡と介助者の踏み込み姿勢に及ぼす影響. 日本人間工学会九州・沖縄支部平成28年度第37回支部大会, 2016年10月

林敬佑, LOH Ping Yeap, Nursalbiah Nasir. 等尺性肘関節屈曲動作のアシスト時における筋活動特性. 日本人間工学会九州・沖縄支部平成28年度第37回支部大会, 2016年10月

宇野直士, 村木里志. 網膜色素変性症による視覚障害が下肢の位置知覚に与える影響. アダプテッド/医療/障がい者体育・スポーツ合同コンGRESS in 北海道, 2016年7月

Srisuro San, 村木里志, Son Su-Young. A study of consumer product packagings and their implication on age-related users. 日本人間工学会第57回大会, 2016年6月

Loh Ping Yeap, 中島弘貴, 村木里志. Metacarpophalangeal joint flexion and

the deformation of median nerve. 日本人間工学会第 57 回大会, 2016 年 6 月

Takeda Eduardo Junji, 村木里志. Effects of aging and training on 3D hand pointing movements without tactile and visual feedback. 日本人間工学会第 57 回大会, 2016 年 6 月

立野謙太, 村木里志. 腕操作面型ウェアラブルデバイス使用時の姿勢の特徴. 日本人間工学会第 57 回大会, 2016 年 6 月

宇野直士, 村木里志. 視野狭窄が下肢を中心とした歩行運動に与える影響. 日本人間工学会第 57 回大会, 2016 年 6 月

田中颯, 中島弘貴, 村木里志. 足踏み動作の若年者と高齢者における比較. 日本人間工学会第 57 回大会, 2016 年 6 月

中島弘貴, 村木里志. 歩行時の下肢関節運動の加齢変化. 日本人間工学会第 57 回大会, 2016 年 6 月

能登裕子, 村木里志. 車いすのティッピングレバー形状が段差乗り上げ操作を行う介助者の筋活動に及ぼす影響. 第 51 回人類動態学会全国大会, 2016 年 6 月

中島弘貴, Loh Ping Yeap, 田中颯, Irma Nur Afiah, 村木里志. 20 歳代から 80 歳代にかけての歩行モーション変化. 日本生理人類学会第 73 回大会, 2016 年 6 月

#### 【その他】

< 特許 >  
特願 2016-237656 発泡樹脂容器

### 大草孝介

#### 【論文】

Okusa, K. & Kamakura, T. Young and Elderly, Normal and Pathological Gait Analysis Using Frontal View Gait Video Data Based on the Statistical Registration of Spatiotemporal Relationship. Cross-Cultural Design, DOI: 10.1007/978-3-319-40093-8\_66, 9741, pp.668-678. 2016

Okusa, K. & Kamakura, T., A Simulation Study on Performance Validation of Indoor Location Estimation Based on the Radial Positive Distribution. IAENG Transaction of Engineering Technologies, DOI: 10.1007/978-981-10-2717-8, Springer-Verlag, pp.89-100., 2017

西田紘子・大草孝介. 日本のプロ・オーケストラのプログラミングに影響を及ぼす要因 - 統計分析を通じて -. 日本文化政策学会, 10, pp.44-59, 2017

#### 【学会発表】

< 国際発表 >

Okusa, K. & Kamakura, T., Statistical indoor location estimation for the NLoS environment using radial distributions. Australian Statistical Conference. (ASC2016), p.14. Dec, 2016

< 国内発表 >

永沼暁・大草孝介. ドップラーセンサを用いた転倒動作のモデリングに関する研究 - 転倒検知システムへの応用 -. 日本計算機統計学会第 30 回大会, pp.13-16. 2016 年 5 月

武尾信之介・大草孝介・鎌倉稔成. 円周状分布を用いた室内位置推定のための幾つかの正の分布の評価. 科研費シンポジウム「空間データと災害の統計モデル」. 2017 年 1 月

原晋之介・大草孝介・鎌倉稔成. 映像データを用いた撮影方向にロバストな歩容特徴量の抽出 - 歩容解析への応用 -. 科研費シンポジウム「空間データと災害の統計モデル」. 2017 年 1 月

永沼暁・大草孝介. マイクロ波ドップラーセンサによる転倒検知のための幾つかの分類モデルの評価. 科研費シンポジウム「空間データと災害の統計モデル」. 2017 年 1 月

大草孝介. センシングデータの統計解析. 第 11 回日本統計学会春季集会. 2017 年 3 月 (招待講演)

### 能登裕子

#### 【論文】

能登裕子, 村木里志. 介助負担と乗り心地を考慮した車いす段差乗り上げ介助操作の姿勢指標. 日本看護技術学会誌, 15(2): 135 - 145, 2016

坂美奈子, 大池美也子, 原田博子, 能登裕子, 道面千恵子. 看護専門学校の看護教員の授業設計における思考様式 - 看護概論担当の看護職員

を対象に -. 日本看護教育学会誌, 26(2): 57-68, 2016

#### 【学会発表】

< 国内発表 >

能登裕子, 村木里志. 車いすティッピングレバー形状が段差乗り上げ操作を行う介助者の筋活動に及ぼす影響. 第 51 回人類動態学会全国大会, 2016 年 06 月

平川善大, 大池美也子, 能登裕子. 看護基礎教育におけるウェブディスカッションを導入した教育実践の利点と課題. 第 11 回医療系 e ラーニング全国交流会, 2016 年 09 月

能登裕子, 村木里志. 車いすのティッピングレバー形状が車いすの軌跡と介助者の踏み込み姿勢に及ぼす影響. 日本人間工学会第 37 回九州・沖縄支部大会, 2016 年 10 月

平川善大, 大池美也子, 能登裕子. 看護基礎教育におけるシミュレーション教育での ICT 教材の活用に関する文献検討. 日本看護研究学会九州・沖縄地方会, 2016 年 11 月

田中里美, 能登裕子. 成人看護学看護過程演習における学生の学習意欲を促進する授業方法の検討. 第 36 回日本看護科学学会学術集会, 2016 年 12 月

### 樋口重和

#### 【論文】

Isoda K, Sueyoshi K, Miyamoto R, Nishimura Y, Ikeda Y, Hisanaga I, Orlic S, Kim Y, Higuchi S. Tangible User Interface and Mu Rhythm Suppression: The Effect of User Interface on the Brain Activity in Its Operator and Observer. Appl. Sci. 7(4), 347, 2017

池田悠稀, 西村悠貴, キムヨシキョウ, 樋口重和. 情動伝染の個人特性と脳内ミラーシステム活動特性の関連. 日本生理人類学会誌 21 (2), 69-74, 2016

#### 【学会発表】

< 国際発表 >

Higuchi S. Individual differences in non-image forming effects of light at night. 15th International Symposium on the Science & Technology of Lighting, Japan, May 2016 (Invited Lecture)

Nishimura Y, Ikeda Y, Higuchi S. Children's mirror system activity is affected by viewpoint difference while observing other's hand actions. The 31st International Congress of Psychology, Japan, July 2016

Higuchi S, Lin Y, Zhang Y, Qiu J, M Ohashi, Sang-il Lee, Kitamura S, Yasukouchi A. Daily light exposure and sleep habits in Japanese and Chinese university students. MHAPR symposium-Modernization and Health in the Asia-Pacific Region, Hawaii, Aug 2016

Lee SI, Huimin Xu, Nishimura K, Tsuyama T, Higuchi S. Delayed circadian phase is associated with late sleep habits in Japanese children. 20th Congress of the European Anthropological Association, Croatia, Aug 2016

Lee SI, Matsumori K, Nishimura K, Humin XU, Tsuyama T, Higuchi S. Light-induced melatonin suppression in children under exposure to different color temperature of lights at night. 23rd Congress of the European Sleep Research Society, Italy, Sep 2016

Nishimura Y, Ikeda Y, Suematsu A, Higuchi S. Effect of Shrt Term Experiences on Mirror Neuron System Activity Differs Between Elementary School and University Students. Social & Affective Neuroscience Society 10th Annual Meeting, Los Angeles, March 2017

< 国内発表 >

池田悠稀, 西村悠貴, 樋口重和. 個人の情動伝染特性とミラーシステム活動特性の関連. 日本生理心理学学会第 34 回大会, 2016 年 5 月

池田悠稀, 西村悠貴, 樋口重和. 子どもの脳内ミラーリング活動は映像刺激の視点の影響を受ける. 日本生理心理学学会第 34 回大会, 2016 年 5 月

西村佳菜, 松森孝平, 許慧敏, 李相逸, 樋口重和. 夜の光環境が大人と子どものメラトニン分泌と眠気に及ぼす影響. 日本生理人類学会第 73 回大会, 2016 年 6 月

許慧敏, 李相逸, 西村佳菜, 北村真吾, 樋口重和. 子どもの睡眠習慣と概日リズム位相の関係. 日本生理人類学会第 73 回大会, 2016 年 6 月

樋口重和. 子どものメラトニンは夜の光の影響を受けやすい (シンボタイトル: LED 照明のビットホール: 睡眠に及ぼす悪影響を考える) 日本睡眠学会第 41 回定期学術集会, 2016 年 7 月

李相逸, 松森孝平, 西村佳菜, 許慧敏, 津山卓也, 樋口重和. LED 照明の色温度と年齢の違いが夜間のメラトニン分泌と眠気に及ぼす影響. 日本睡眠学会第 41 回定期学術集会, 2016 年 7 月

樋口重和. 日常的な夜の光環境は睡眠リズムに作用するか? (シンポジウム: 睡眠と健康: 光環境を見直す). 第 8 回日本臨床睡眠医学会, 2016 年 8 月

池田悠稀, 西村悠貴, 樋口重和. 感情プライミング効果と個人の情動伝染特性の関連. 日本生理人類学会第 74 回大会, 2016 年 10 月

平原楓, 西村悠貴, 池田悠稀, 末松愛理, 江頭優佳, 樋口重和. ヒトの行為に関するオノマトペがミラーシステム活動に与える影響. 日本生理人類学会第 74 回大会, 2016 年 10 月

末松愛理, 平原楓, 池田悠稀, 西村悠貴, 樋口重和. 美的経験が彫刻画像観察時の事象関連電位へ与える影響. 日本生理人類学会第 74 回大会, 2016 年 10 月

西村悠貴, 池田悠稀, 末松愛理, 樋口重和. 小学生の脳内ミラーシステムは若年者よりも模倣経験の影響を強く受ける. 日本生理人類学会第 74 回大会, 2016 年 10 月

樋口重和. ヒトにおける生体リズム測定 (シンポジウム: 時間生物学における代替法研究～細胞・個体における概日リズム機構とその応用～). 第 29 回日本動物実験代替法学会, 2016 年 11 月

津山卓也, 野口杏奈, 木之下早紀, 西田隆, 阿波田康裕, 李相逸, 樋口重和. 夜勤時の照度色温度可変照明が生体リズム位相に与える効果. 2016 年度日本生理人類学会研究奨励発表会, 2016 年 12 月

江田裕貴, 西村悠貴, 池田悠稀, 磯田和生, 樋口重和. 曲面ディスプレイは表情のカテゴリー知覚にどのような影響を及ぼすか. 2016 年度日本生理人類学会研究奨励発表会, 2017 年 2 月

#### 【その他】

##### <受賞>

日本睡眠学会第 41 回定期学術集会ベストプレゼンターシン賞, 李相逸, 松森孝平, 西村佳菜, 許慧敏, 津山卓也, 樋口重和. LED 照明の色温度と年齢の違いが夜間のメラトニン分泌と眠気に及ぼす影響. 2016 年 7 月

日本生理人類学会第 74 回大会優秀発表賞, 池田悠稀, 西村悠貴, 樋口重和. 感情プライミング効果と個人の情動伝染特性の関連. 2016 年 10 月

#### 松隈浩之

##### 【講演】

##### <国内講演>

平成 29 年 2 月, 「A study of serious game for healthcare and rehabilitation」, 第 1 回シリアス&アブライドゲームサミット

平成 28 年 11 月, 「A study of serious game for healthcare and rehabilitation」, MEIS2016

平成 28 年 10 月, 「半側空間無視訓練用ゲーム「たたけバンバン職人」の検証結果報告」, コンピューターエンターテインメントデベロッパーズカンファレンス (KYUSHU CEDEC2016)

平成 28 年 8 月, 「半側空間無視訓練用ゲーム「たたけ!バンバン職人」の検証結果報告」, コンピューターエンターテインメントデベロッパーズカンファレンス (CEDEC2016)

平成 28 年 8 月, 「社会問題解決に向けたヘルスケアとエンターテインメントとアート」, IoT セミナー

平成 28 年 3 月, 「高齢者向けリハビリ・ヘルスケアゲームの研究開発」, 第 2 回健康科学ビジネス創造フォーラム～健康科学ビジネスベストセクションズ発表式～

##### <海外講演>

平成 28 年 11 月, 「Development and Verification of the Game Locomo de Balamingo」, Asia Digital Art and Design Association 2016 (インドネシア)

##### 【学外講義】

平成 28 年 10 月, シリアスゲーム授業, 鹿児島県立大島高等学校

平成 28 年 9 月, PENKEI PAX SCHOOL, 日英産学連携プログラム, 立命館大学

##### 【展示・ブース出展】

平成 29 年 2 月, 第 1 回シリアス&アブライドゲームサミット, オランダ王国大使館

平成 28 年 10 月, すこやかフェスタ 2016, エルガーラホール

平成 28 年 8 月, 第 16 回広島国際アニメーションフェスティバル, JMS アステールプラザ

平成 28 年 8 月, 遊べるデジタルアート展, アクロス福岡・交流ギャラリー

平成 28 年 6 月, 第 99 回ライオンズクラブ国際大会, 福岡ヤフオクドーム

##### 【TV・ラジオ出演】

平成 28 年 7 月, NHK 総合, 「週刊ニュース深読み」

平成 28 年 5 月, NHK 教育放送, 「SWITCH インタビュー達人達 (たち)」

##### 【新聞・雑誌・書籍・Web サイト】

平成 28 年 4 月, Social Game Info (スマホアプリソーシャルゲーム情報サイト), 記事掲載「学校トーク!!」

##### 【その他】

平成 29 年 福岡アジア文化賞 芸術・文化賞選考委員会 委員

平成 28 年 アジアデジタルアート大賞展実行委員会 事務局長

平成 28 年 Asia Digital Art and Design Association Japan 理事

平成 28 年 日本デジタルゲーム学会 理事

#### 平松千尋

##### 【学会発表】

##### <国際発表>

Hiramatsu C, Ogata S, Seno T. Synesthetic correspondences between cover art images and music tracks. The Visual Science of Art Conference 2016, Spain, Aug 2016

Hiramatsu C, Melin AD, Allen WL, Dubuc C, Higham JP. Is primate trichromacy optimized for detecting variation in face coloration? European Conference on Visual Perception, Spain, Aug 2016

##### <国内発表>

藤井義孝, 妹尾武治, 平松千尋. ベクシヨンの斜め効果と視運動性眼振. 第 29 回 VR 心理学研究委員会, 2017 年 3 月

坂口寛明, 高嶋龍彦, 田嶋達裕, 妹尾武治, 平松千尋. 絵画鑑賞における印象と色覚の多様性の関連. 2016 年度日本生理人類学会研究奨励発表会, 2017 年 2 月

高嶋龍彦, 坂口寛明, 田嶋達裕, 妹尾武治, 平松千尋. 絵画鑑賞時の視覚的注意に色覚型が及ぼす影響 - 顕著性を用いた予測と視線計測 - による検証. 2016 年度日本生理人類学会研究奨励発表会, 2017 年 2 月

##### 【その他】

##### <アウトリーチ活動>

福岡サイエンスパークでの講演: 第 4 4 回サイエンスカフェ@ふくおか, 「色覚進化の謎に迫る! ~霊長類の色覚の進化と多様性~」, 2017 年 2 月 24 日

#### 橋彌和秀

##### 【論文】

Meng X, Uto Y, Hashiya K. Observing Third-Party Attentional Relationships Affects Infants' Gaze Following: An Eye-Tracking Study. Frontiers in psychology, 7:2065, 2017

##### 【学会発表】

##### <国際発表>

Kishimoto R, Hashiya K. Children avoid "calculated" helpers based on third-party observation: the "peeking" experiment, 2017 Budapest CEU Conference on Cognitive Development, Budapest, January 5-7, 2017

Hashiya K, Tajiri K, Meng X, Kobayashi H, Uto Y, Maeyama K, Osanai H, Hakarino K, Tojo Y, Saito A and Hasegawa T. Developmental origin of involuntary facial mimicry: studies of infants, and children with/without ASD, 2017 Budapest CEU Conference on Cognitive Development, Budapest, January 5-7, 2017

Saito A, Ikeda K, Kobayashi H, Hashiya K. Developmental changes of

perceived cuteness in various species: from an altricial-precocial perspective. 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Kanagawa, July 24-29, 2016

Hashiya K. Involuntary facial mimicry in ASD / TD children: an EMG study with static / morphing facial stimuli. 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Kanagawa, July 24-29, 2016

Norimatsu H, Blin R, Sorsana C, Hashiya K, Kobayashi H. ToM ability tested with the "disambiguation task" in French & Japanese children aged 16-38 months. 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Kanagawa, July 24-29, 2016

Maeyama K & Hashiya K. Possible factors forming in-group preference in 3-4 year old children: through the looking preference studies. 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Kanagawa, July 24-29, 2016

Uto Y, Maruta M, Hashiya K. Communication Goes Multimodal: Effect of Different Interjections on Intention Inference of the Interaction in Visual Modality. 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Kanagawa, July 24-29, 2016

Murakami T, Meng X, Hashiya K. Cross-linguistic comparison of interpretation of ambiguous utterances in Japanese and Chinese children. 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Kanagawa, July 24-29, 2016

Meng X, Uto Y, Hashiya K. Expectations about third-party joint interactions in infancy. 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Kanagawa, July 24-29, 2016

Ishikawa K, Meng X, Hashiya K. The developmental change of moral judgment for the case of collective action. 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Kanagawa, July 24-29, 2016

#### < 国内発表 >

橋瀬和秀. 「合う」を検出するところの適応の意味, 会員企画ラウンドテーブル「合う」ことの意味を考えるーリズム、発達、コミュニケーションの理解に向けてー」指定討論, 日本発達心理学会第 28 回大会, JMS アステールプラザ (広島県広島市), 2017 年 3 月 25 日 ~ 3 月 28 日

橋瀬和秀. 「教え」と「教わる」のあいだ, 会員企画ラウンドテーブル「教え・教わる」の起源を探るー情報伝達の発達に関する実験的考察ー」指定討論, 日本発達心理学会第 28 回大会, JMS アステールプラザ (広島県広島市), 2017 年 3 月 25 日 ~ 28 日

孟憲巍・橋瀬和秀. 他者理解に基づく協力的初期発達 ~ 1 歳半児の指差しと注視行動を指標として ~, 日本発達心理学会第 28 回大会, 広島国際会議場 (広島県広島市), 2017 年 3 月 25 日 ~ 28 日

孟憲巍・宇土裕亮・橋瀬和秀. 1 歳半児が示す自他の知識・知覚状態の差異への感受性 ~ 三人称的視点からの検討 ~, ヒューマンコミュニケーション基礎研究会, なみきスクウェア (福岡県福岡市), 2017 年 1 月 27 日 ~ 28 日

橋瀬和秀. 発達から見た一人称的共感と三人称的共感: 統合的視点の探索, 新学術領域研究「共感性の進化・神経基盤」第 4 回領域会議, 慶應大学 (東京都港区), 2017 年 1 月 21 日 ~ 22 日

宇土裕亮・橋瀬和秀. 他者の心的状態の手がかりとしての感嘆詞: 成人および幼児の意図推論における感嘆詞の利用, 新学術領域研究「共感性の進化・神経基盤」第 4 回領域会議, 慶應大学 (東京都港区), 2017 年 1 月 21 日 ~ 22 日

孟憲巍・橋瀬和秀. 認知的共感の初期発達: 1 歳半児が示す自他・他者間の心的状態の差異への感受性, 新学術領域研究「共感性の進化・神経基盤」第 4 回領域会議, 慶應大学 (東京都港区), 2017 年 1 月 21 日 ~ 22 日

孟憲巍・橋瀬和秀. 1 歳半児が示す自他の知識・知覚状態の差異への感受性: 一人称および三人称的視点からの検討, 日本人間行動進化学会第 9 回大会, 金沢市文化ホール (石川県金沢市), 2016 年 12 月 10 日 ~ 11 日

橋瀬和秀. 「わたしたち」は「わたし」の先にあるのか? 「われわれからわたし、わたしからわれわれーわれわれ感の起源の学際的研究ー」, 日本赤ちゃん学会第 16 回学術集会, 同志社大学 (京都府京都市), 2016 年 5 月 21 日 -22 日

宇土裕亮・橋瀬和秀. 他者への意図帰属に感嘆詞が及ぼす効果とその発達, 日本赤ちゃん学会第 16 回学術集会, 同志社大学 (京都府京都市), 2016 年 5 月 21 日 -22 日 (最優秀ポスター賞)

孟憲巍・宇土裕亮・橋瀬和秀. 他者同士のやりとりを乳児はどのように見ているかー乳児の注視パターンに注目してー, 日本赤ちゃん学会

第 16 回学術集会, 同志社大学 (京都府京都市), 2016 年 5 月 21 日 -22 日

山手秋穂・若藤礼子・橋瀬和秀. "因果応報" 的ストーリーへの期待とその発達, 日本赤ちゃん学会第 16 回学術集会, 同志社大学 (京都府京都市), 2016 年 5 月 21 日 -22 日

前山航暉・橋瀬和秀. 幼児にとつての「内集団」: 3, 4 歳児の二者間の競合場面に対する注視行動の分析から, 日本赤ちゃん学会第 16 回学術集会, 同志社大学 (京都府京都市), 2016 年 5 月 21 日 -22 日

孟憲巍・宇土裕亮・橋瀬和秀. 0-1 歳児における他者間のインタラクションに関する期待, 日本発達心理学会第 27 回大会, 北海道大学 (北海道札幌市), 2016 年 4 月 29 日 -5 月 1 日

橋瀬和秀・小林洋美・孟憲巍・宇土裕亮・前山航暉・長内博雄・計野浩一郎・東條吉邦・齋藤慈子・長谷川寿一. ASD 児・TD 児における動画および静止画に対する「自動的」表情模倣, 日本発達心理学会第 27 回大会, 北海道大学 (北海道札幌市), 2016 年 4 月 29 日 -5 月 1 日

宇土裕亮・丸田弥音・橋瀬和秀. 幼児における他者の感嘆詞にもとづいた意図推論の発達, 日本発達心理学会第 27 回大会, 北海道大学 (北海道札幌市), 2016 年 4 月 29 日 -5 月 1 日

#### 【その他】

##### < メディア掲載 >

Academist Journal. 孟憲巍・橋瀬和秀 (2016): 「教え」、「気遣う」赤ちゃんー 1 歳半児は相手の知識や注意状態を踏まえてコミュニケーションする. (研究コラム)

NHK 福岡「ロクいち福岡!」、日本経済新聞、excite ニュース、BIGLOBE ニュース

孟憲巍・宇土裕亮・橋瀬和秀 (2016) Observing Third-Party Attentional Relationships Affects Infants' Gaze Following: An Eye-Tracking Study スイスオンライン科学誌 "Frontiers in Psychology" に掲載

#### 綿貫茂喜

##### 【論文】

Motoi M, Nishimura T, Egashira Y, Kishida F, Watanuki S. Relationship between mitochondrial haplogroup and physiological responses to hypobaric hypoxia. Journal of Physiological Anthropology, 35:12, Apr 2016

Choi D, Minote N, Sekiya T, Watanuki S. Relationships between trait empathy and psychological well-being in Japanese university students. Psychology, 7:1240-1247, Aug 2016

岸田文, 崔多美, 綿貫茂喜. 若年日本人男性におけるセロトニントランスporter-遺伝子多型と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求の関連. 日本生理人類学会誌, 21(3), 115-119, 2016 年 8 月

Choi D, Sekiya T, Minote N, Watanuki S. Relative left frontal activity in reappraisal and suppression of negative emotion: Evidence from frontal alpha asymmetry (FAA). International Journal of Psychophysiology, 109:37-44. Nov 2016

Wakabayashi H, Nishimura T, Wijayanto T, Watanuki S, Tochihara Y. Effect of repeated forearm muscle cooling on the adaptation of skeletal muscle metabolism in humans. International Journal of Biometeorology, Jan 2017, DOI: 10.1007/s00484-016-1303-z

Choi D, Minote N, Watanuki S. Associations between the oxytocin receptor gene (OXTR) rs53576 polymorphism and emotional processing of social and nonsocial cues: an event-related potential (ERP) study, Journal of Physiological Anthropology, 36:12, Jan 2017

##### 【学会発表】

##### < 国際発表 >

Choi D, Sekiya T, Minote N, Watanuki S. Oxytocin receptor gene polymorphism affects processing of gaze direction. 9th Annual Meeting of the Social & Affective Neuroscience, New York, U.S.A, Apr 2016

Choi D, Minote N, Sekiya T, Watanuki S. Association between psychological Well-being and subjective valence rating of images. The 6th Asian Congress of Health Psychology (ACHP2016), Yokohama, Jul 2016

##### < 国内発表 >

江頭優佳, 綿貫茂喜. 湿度印象を意味するオノマトへの認知処理と湿度環境の関連. 第 34 回日本生理心理学会大会, 2016 年 5 月

岸田文, 崔多美, 綿貫茂喜. セロトニントランスporter-遺伝子多型が賞賛獲得欲求・拒否回避欲求に及ぼす影響. 日本生理人類学会第 73 回大会, 2016 年 6 月

本井 碧, 黒田知宏, 岸田文, 西村貴孝, 綿貫茂喜. 低酸素環境下における事象関連電位とミトコンドリア DNA ハプロタイプの関連. 日本生理人類学会第 73 回大会, 2016 年 6 月

崔 多美, 太田将太郎, 綿貫茂喜. 喫煙が生理心理反応に及ぼす影響 - 快情動付与時の反応 -. 日本生理人類学会第 73 回大会, 2016 年 6 月

崔 多美 (Damee Choi), 関谷崇寛 (Takahiro Sekiya), 蓑手なつ美 (Natsumi Minote), 綿貫茂喜 (Shigeki Watanuki). ネガティブな刺激の再評価時の大脳半球優位性の個人差 (Association between habitual use of reappraisal and frontal alpha asymmetry during reappraisal of negative stimuli), 第 39 回日本神経科学大会 (The 39th Annual Meeting of the Japan Neuroscience Society), 2016 年, 7 月

辻 春奈, 崔 多美, 蓑手なつ美, 綿貫茂喜. オキシトシン受容体遺伝子多型 (rs 53576) による性格特性の違い. 日本生理人類学会第 74 回大会, 2016 年 10 月

蓑手なつ美, 崔 多美, 関谷崇寛, 綿貫茂喜. 情動調節時の脳活動とオキシトシン受容体遺伝子多型 (rs 53576) の関連. 日本生理人類学会第 74 回大会, 2016 年 10 月

江頭優佳, 城屋敷 謙, 中島孝明, 藤 智亮, 尾方義人, 綿貫茂喜. レジリエンスアシストデザインのための閉所空間暴露時におけるヒトの認知処理機能の特徴. 日本生理人類学会第 74 回大会, 2016 年 10 月

岸田文, 江頭優佳, 藤 智亮, 尾方義人, 縄田健悟, 大草孝介, 能登裕子, 山田クリス孝介, 綿貫茂喜. 他者が存在するという刺激が自己の注意の認知過程に及ぼす影響と性格特性の関連. 平成 28 年度日本生理人類学会研究奨励発表会 (九州地区), 2017 年 2 月

城屋敷 謙, 江頭優佳, 中島孝明, 綿貫茂喜. 生活空間の横幅が生理心理反応に及ぼす影響. 平成 28 年度日本生理人類学会研究奨励発表会 (九州地区), 2017 年 2 月

尾方義人, 江頭優佳, 能登裕子, 縄田健悟, 大草孝介, 藤 智亮, 綿貫茂喜, 山田クリス孝介. 熊本地震避難所の揭示情報からみる生活者のレジリエンス分析. 地区防災計画学会第 3 回大会, 2017 年 3 月

尾方義人, 西村英伍, 山田クリス孝介, 江頭優佳, 能登裕子, 縄田健悟, 大草孝介, 藤 智亮, 綿貫茂喜. レジリエンスデザインによるサービス設計方法. サービス学会第 5 回大会, 2017 年 3 月

#### 【その他】

<受賞>

平成 28 年度日本生理人類学会研究奨励発表会優秀発表賞受賞, 城屋敷 謙, 江頭優佳, 中島孝明, 綿貫茂喜. 生活空間の横幅が生理心理反応に及ぼす影響. 2017 年 2 月

## 尾方義人

### 【著書】

尾方義人他, デザイン保護法制の現状と課題, 日本評論社, 2016 年 12 月

尾方義人, でんきと自動車 02 - Design Thinking 歴史 1 1800 年代 - 1950 年代黎明期, 住まいとでんき, 日本工業出版, 2016 年 6 月号 72-73pp.

尾方義人, でんきと自動車 03 - Design Thinking 歴史 2 1980 年代後半 ~ 1990 年代ゼロエミッション規制, 住まいとでんき, 2016 年 7 月号 72-73pp, 日本工業出版

尾方義人, 九州大学男女共同参画推進室ダイバーシティニュース, 男女共同参画推進室, ダイバーシティニュース 7 月号, 2016 年 6 月  
尾方義人, カーボンファイバーのデザインの可能性に関する報告書, アトラス化成, 2016 年 6 月

尾方義人, 被災者に力を借りる - レジリエンスデザイン -, 人類動態学会会報, 第 104 号 10p

尾方義人, でんきと自動車 04 - Design Thinking 歴史 3 2000 年以降新しいハイブリッドカーへの技術応用, 住まいとでんき, 2016 年 8 月号, 72-73pp, 日本工業出版

尾方義人, でんきと自動車 05 - Design Thinking 種類と特徴 二次電池・金属燃料電池・水素燃料電池・架線集電式・間欠給電式・駆動系等 技術と形について, 住まいとでんき, 2016 年 9 月号, 72-73pp, 日本工業出版

尾方義人, でんきと自動車 06 - Design Thinking 電気自動車の問題 バッテリー・材料・効率・公共性・インフラ 社会問題等住まいとでんき,

2016 年 10 月号, 72-73pp, 日本工業出版

尾方義人, でんきと自動車 07 - Design Thinking ビジネスモデル 例 モータースポーツ他, 住まいとでんき, 2016 年 11 月号, 72-73pp, 日本工業出版

尾方義人, でんきと自動車 08 - Design Thinking アメリカ合衆国の事例, 住まいとでんき, 2016 年 12 月号, 72-73pp, 日本工業出版

尾方義人, でんきと自動車 09 - Design Thinking ヨーロッパアジア他の事例, 住まいとでんき, 2017 年 1 月号, 72-73pp, 日本工業出版

尾方義人, でんきと自動車 10 - Design Thinking 日産・三菱・ダイハツの事例, 住まいとでんき, 2017 年 2 月号, 72-73pp, 日本工業出版

尾方義人 他, 第 18 回福岡デザインアワード 2016 報告書, 福岡県産業デザイン協議会, 福岡県, 2017 年 2 月

尾方義人, でんきと自動車 11 - Design Thinking スバル・光岡・ゼロスポーツ等の事例, 住まいとでんき, 2017 年 3 月号 72-73pp, 日本工業出版

尾方義人, 被災地におけるレジリエンスデザインに関する研究報告書, 九州大学, P&P, 2017 年 3 月

### 【論文】

宋暢, 劉瑾, 尾方義人, Analysis of the situation of the aging elderly Construction engineering technology and design, No98, 358p, Sichuan Provincial Education Agency, 2017 年 5 月

宋暢, 賀佳, 尾方義人, レジリエンスについての行為分析に基づく製品設計の応用研究, 中華民国設計学会誌, 2017 年 5 月

林英博, 尾方義人, The Early Investigation and Thinking on the Design of the Old Household Product Design"SSN: 2095-8412, China, Industrial Technology Innovation, 2017 年 7 月

尾方義人, 西村英吾, 江頭優佳, 藤 智亮, 綿貫茂喜, レジリエンスデザイン方法試論, 九州大学大学院芸術工学研究院紀要, 2017 年 3 月

### 【学会発表】

<国際発表>

Ogata Yoshito, Design on Science Method; Resilience Design, Sichuan University of Media and Communications, 2016 年 9 月

Ogata Yoshito, Resilience Design on Science Method, Sichuan Normal University, 2016 年 9 月

Ogata Yoshito, Resilience Design on Science Method, Southwest Jiaotong University, 2016 年 9 月

Ogata Yoshito, Design on Science Method, Resilience Design, Beijing Institute of Technology, 2016 年 9 月

Ogata Yoshito, Resilience Design on Science Method, Method on Resilience Design, Central Academy of Fine Arts, 2016 年 9 月

<国内発表>

尾方義人, 被災者に力を借りる - レジリエンスデザイナー, 動態人類学会, 2016 年 6 月

尾方義人, 福岡丸本コンペディション講演, 福岡丸本株式会社, 2016 年 6 月

李 東海, 穆 シントウ, 呼延 鵬, 尾方義人, 被災地におけるレジリエンスデザインの調査方法について, 日本デザイン学会, 2016 年 9 月

柴田 英後, 尾方 義人, 多久市園児の脚変形計測 - 変形改善のためのレジリエンスメソッドの可能性, 日本デザイン学会, 2016 年 10 月

尾方 義人, 劉 瑾, 藤 智亮, 光岡 真里, 藤田 徹郎, 田上 暢頼, レジリエンスとしての高齢者学習活動の行為分析, 日本デザイン学会, 2016 年 10 月

三舛悦人, 尾方 義人, ウルム造形大学におけるデザイン方法に関する研究, 日本デザイン学会, 2016 年 10 月

金澤尚樹, 辻本 寛治, 河野圭紀, 尾方 義人, ゴミ袋のユニバーサルデザイン, 日本デザイン学会, 2016 年 10 月

賀 佳, 尾方 義人, タイプライターの広告にみるジェンダーについて, 日本デザイン学会, 2016 年 10 月

江頭優佳, 城屋敷謙, 中島孝明, 尾方 義人, 藤 智亮, 綿貫 茂喜, レジリエンスアシストデザインのための閉所空間暴露時におけるヒトの認

知処理機能の特徴, 生理人類学会, 2016 年 10 月

高品, 江頭優佳, 三舛悦人, 尾方義人, レジリエンスデザインとしての環境の構築, 日本デザイン学会, 2016 年 10 月

李東海, 応夢, 江頭優佳, 金澤尚樹, 尾方義人, 災害避難所の居住情報分析 - レジリエンスからサービスをみる, 日本デザイン学会, 2017 年 1 月 2

宋暢, 尾方義人, レジリエンスデザインとしての行動変容の研究 - 省エネルギー行動の促進に向けて, 九州大学エネルギーウィーク 2017, 2017 年 1 月

高品, 尾方義人, エネルギーのレジリエンスデザインとしての茶, 九州大学エネルギーウィーク 2017, 2017 年 1 月

尾方義人, 江頭優佳, 能登裕子, 縄田健悟, 大草孝介, 藤智亮, 綿貫茂喜, 山田クリス孝介, 熊本地震避難所の揭示情報からみる生活者のレジリエンス分析, 地区防災学会, 2017 年 1 月

尾方義人, 消費者分析と商品開発について, 福岡産業デザイン協議会 WS 講演, 2017 年 3 月

尾方義人, 西村英伍, 山田クリス孝介, 江頭優佳, 能登裕子, 縄田健悟, 大草孝介, 藤智亮, 綿貫茂喜, レジリエンスデザインによるサービス設計方法, サービス学会, 2017 年 3 月

#### 【その他】

< 受賞 >

尾方義人, 糸島市感謝状 (渡船ひめしまデザインに対して), 2016 年 4 月

尾方義人, 2016 福岡デザインアワード 優秀賞, 2016 年 4 月

< 作品 >

尾方義人 ウェブページ搭載ラマン顕微鏡 RAMANdrive 及び先端増強ラマン散乱顕微鏡 TERSense, 株式会社ナノフォトン, 2016 年 8 月

尾方義人, 三舛悦人, ほこらの杜 神棚, 有限会社アマート, 2016 年 10 月

尾方義人, 三舛悦人, 糸島市定住促進用ポスター, 糸島市, 2016 年 11 月

< メディア掲載 >

NHK 社会連携事業の実施の紹介 2016 年 10 月

佐賀新聞 社会連携事業の実施の紹介 2016 年 10 月

西日本新聞 熊本地震避難所調査の記事, 2017 年 3 月

朝日新聞 熊本地震避難所調査の記事, 2017 年 3 月

## 藤智亮

#### 【学会発表】

< 国内発表 >

劉瑾, 尾方義人, 藤智亮, 光岡眞里, 藤田徹郎, 田上暢顕, レジリエンスとしての高齢者学習活動の行為分析, 日本デザイン学会第 5 支部平成 28 年度研究発表会, 2016 年 10 月

江頭優佳, 城屋敷謙, 中島孝明, 藤智亮, 尾方義人, 綿貫茂喜, レジリエンスアシストデザインのための閉所空間暴露時におけるヒトの認知処理機能の特徴, 日本生理人類学会第 74 回大会, 2016 年 10 月

岸田文, 江頭優佳, 藤智亮, 尾方義人, 縄田健悟, 大草孝介, 能登裕子, 山田クリス孝介, 綿貫茂喜, 他者が存在するという刺激が自己の注意の認知過程に及ぼす影響と性格特性の関連, 平成 28 年度日本生理人類学会研究奨励発表会 (九州地区), 2017 年 2 月

尾方義人, 江頭優佳, 能登裕子, 縄田健悟, 大草孝介, 藤智亮, 綿貫茂喜, 山田クリス孝介, 熊本地震避難所の揭示情報からみる生活者のレジリエンス分析, 地区防災計画学会第 3 回大会, 2017 年 3 月

尾方義人, 西村英伍, 山田クリス孝介, 江頭優佳, 能登裕子, 縄田健悟, 大草孝介, 藤智亮, 綿貫茂喜, レジリエンスデザインによるサービス設計方法, 2017 年度サービス学会第 5 回 国内大会, 2017 年 3 月

綿貫茂喜, 尾方義人, 藤智亮, 能登裕子, 縄田健悟, 大草孝介, 山田クリス孝介, 未来の安心のための災害避難所に関するレジリエンスアシストサービス実装の可能性調査, JST RISTEX 未来を共創するサービス研究開発の可能性調査終了報告会, 2017 年 3 月

## 山田クリス孝介

#### 【論文】

Izawa S, Nakamura-Taira N, Yamada KC. Stress Underestimation and Mental Health Outcomes in Male Japanese Workers: a 1-Year Prospective Study. Int J Behav Med. 2016 Dec;23(6):664-669.

Miike T, Sakamoto Y, Sakurai R, Ohta M, Goto A, Imahase H, Yahata M, Umeka M, Koami H, Yamada KC, Fujita R, Nagashima F, Iwamura T, Inoue S. Effects of hyperbaric exposure on thrombus formation. Undersea Hyperb Med 2016;43(3):233-8.

Koami H, Sakamoto Y, Sakurai R, Ohta M, Imahase H, Yahata M, Umeka M, Miike T, Nagashima F, Iwamura T, Yamada KC, Inoue S. The thromboelastometric discrepancy between septic and trauma induced disseminated intravascular coagulation diagnosed by the scoring system from the Japanese association for acute medicine. Medicine (Baltimore). 2016 Aug;95(31):e4514.

Koami H, Sakamoto Y, Sakurai R, Ohta M, Goto A, Imahase H, Yahata M, Umeka M, Miike T, Nagashima F, Iwamura T, Chris Yamada K, Inoue S. Utility of Measurement of Serum Lactate in Diagnosis of Coagulopathy Associated with Peripheral Circulatory Insufficiency: Retrospective Evaluation Using Thromboelastometry from a Single Center in Japan. J Nippon Med Sch. 2016;83(4):150-7.

#### 【学会発表】

< 国際発表 >

Yamada KC, Nakamura-Taira N, Izawa S. Association between stress underestimation and information about mental health among Japanese workers. The 31st International Congress of Psychology (ICP 2016), Japan, July 2016

Yamada K, Hope T, Watanabe K, Sunaga T, Kobayakawa M, Nishimura T. A qualitative comparison of paper and electronic health records of nursing in a university hospital in Japan. The 4th International Conference on Serviceology (ICServ2016), Japan, Sep 2016

Yamada K, Sakamoto Y, Fujii S. Impact of diabetes mellitus on hospitalization charges of patients with sepsis: a single-center retrospective study in Japan. 41st ANZICS/ACCCN ASM Annual Scientific Meeting 2016, Australia, Oct 2016

Yamada KC, Izawa S, Nakamura-Taira N, Tanoue A. The impact of fear appeals about mental health on internet behavior in Japanese workers: an experimental study. The 14th International Congress of Behavioral Medicine (ICBM 2016), Australia, Dec 2016

< 国内発表 >

ホーフトム, 山田クリス孝介, 渡辺健太郎. Understanding Caring Events through Narrative in Paper and Electronic Health Records. 人工知能学会全国大会 (第 30 回), 北九州, 2016 年 6 月

山田クリス孝介, 吉武良治, 松田文子, 大内啓子, 齋藤裕太, 泉博之, 松岡敏生, 榎原毅. 日本人間工学会バーチャルミュージアム構想と学生プロジェクトの概要. 日本人間工学会第 57 回大会, 三重, 2016 年 6 月

皆川和輝, 時田郷, 押野沙紀, 村瀬裕子, 山田クリス孝介, 吉武良治. バーチャルミュージアムプロジェクトのプロセスと手法. 日本人間工学会第 57 回大会, 三重, 2016 年 6 月

山田クリス孝介, 小網博之, 永嶋太, 岩村高志, 三池徹, 八幡真由子, 今長谷尚史, 太田美穂, 櫻井良太, 井上聡, 阪本雄一郎. 救急医療と ICT 新たな展開への挑戦 佐賀県における救急医療への ICT の応用, 第 44 回日本救急医学会総会・学術集会, 東京, 2016 年 9 月

小網博之, 阪本雄一郎, 太田美穂, 今長谷尚史, 八幡真由子, 梅香満, 三池徹, 永嶋太, 岩村高志, 山田クリス孝介, 井上聡. 大量輸血を再考する Massive transfusion protocol は本当に使えるのか? 重症外傷患者に対する MTP を補完するために Thromboelastometry をいかに活用すべきか? 第 44 回日本救急医学会総会・学術集会, 東京, 2016 年 9 月

三池徹, 阪本雄一郎, 岩村高志, 永嶋太, 小網博之, 山田クリス孝介, 八幡真由子, 今長谷尚史, 太田美穂, 櫻井良太, 井上聡. 高気圧酸素治療が一酸化炭素中毒患者の凝固系に及ぼす影響 (TEG6s を用いて). 第 44 回日本救急医学会総会・学術集会, 東京, 2016 年 9 月

今長谷尚史, 阪本雄一郎, 小網博之, 三池徹, 八幡真由子, 太田美穂, 梅香満, 永嶋太, 岩村高志, 井上聡, 山田クリス孝介. 敗血症患者の SOFA 分析から考える重症度評価について. 第 44 回日本救急医学会総会・学術集会, 東京, 2016 年 9 月

三池 徹, 阪本 雄一郎, 岩村 高志, 永島 太, 小網 博之, 山田 クリス孝介, 八幡 真由子, 今長谷 尚史, 太田 美穂, 櫻井 良太, 井上 聡. 感染症患者における血小板機能の変化 (T-TAS の解析から). 第 44 回日本救急医学会総会・学術集会, 東京, 2016 年 9 月

山田クリス孝介. 看護における医美工連携プロジェクト. 第 39 回佐賀救急医学会, 佐賀, 2016 年 9 月

野中 小百合, 川人 学, 山田 クリス孝介, 藤井 進, 福島 常浩, 末岡 榮三朗, 宮崎 耕治. 自己疾病管理を目的とした PHR カードの発行とサービスの開始と評価. 佐賀 MIRCA. 第 36 回 医療情報学連合大会 (第 17 回日本医療情報学会学術大会), 横浜, 2016 年 11 月

井澤 修平, 山田 クリス孝介, 中村 菜々子, 田上 明日香. ウェブを利用したストレスの情報呈示に関する実験的研究. 第 29 回日本健康心理学会, 岡山, 2016 年 11 月

## 縄田健悟

### 【著書】

青島未佳・山口 裕幸・縄田健悟 (2016) 『高業績チームはここが違う — 成果を上げるために必要な三つの要素と五つの仕掛け—』 労務行政

### 【論文】

Nawata, K., Huang, L., & Yamaguchi, H. (2016). Anti-Japanese public attitude as conformity to social norm in China: Role of estimated attitude of others and pluralistic ignorance. *Japanese Journal of Applied Psychology*, 42, 16-24.

秋保亮太・縄田健悟・中里陽子・菊地梓・長池和代・山口裕幸 (2016). メンタルモデルを共有しているチームは対話せずとも成果を挙げる: 共有メンタルモデルとチーム・ダイアログがチーム・パフォーマンスへ及ぼす効果, 実験社会心理学研究, 55, 101-109.

### 【学会発表】

< 国際発表 >

Nawata, K., Akiho, R., Yamaguchi, H., & Aoshima, M. (2016) The team-level processes of implicit coordination in Japanese organization: the role of daily communication and shared team cognition. 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan.

< 国内発表 >

有吉美恵・縄田健悟・池田浩・山口裕幸 (2016). ワークモチベーションにおける社会的貢献感の役割: コールセンター受電業務オペレータを対象とした調査研究. 産業・組織心理学会第 32 回大会 (立教大学)

秋保亮太, 縄田健悟, 池田浩, 山口裕幸 (2016). チームワークは継承されるか?: 協調迷路課題を用いた実験的検討. 日本社会心理学会第 57 回大会 (関西学院大学) 2016/9/17,18

黄麗華・縄田健悟・山口裕幸 (2016). 集団間接触と攻撃政策への支持の関係性における敵意帰属の媒介効果. 日本グループ・ダイナミックス学会第 63 回大会 (九州大学)

Ariyoshi, M., Nawata, K., Ikeda, H., & Yamaguchi, H. (2016). A Study on Work Motivation of Call Center Operators. *International Congress of Psychology 2016 (ICP2016)*, Yokohama, Japan. 2016/7/24-29

Huang, L., Nawata, K., Miyajima, T., & Yamaguchi, H. (2016). Values and Hostile Intent Attribution to Out-Groups within China and Japan Relations. *International Congress of Psychology 2016 (ICP2016)*, Yokohama, Japan. 2016/7/24-29

## 外部研究資金一覧

### 環境適応研究部門

#### 競争的資金

- 2013年度～2017年度, 基盤研究(A), 代表, 「ゲノム情報・生理的多型性・行動からみた光環境における遺伝的及び可塑的適応性の評価」(安河内朗)
- 2015年度～2017年度, 挑戦的萌芽研究, 代表, 「ヒト褐色脂肪活性の簡易評価手法の検討」(前田享史)
- 2014年度～2017年度, 基盤研究(B), 代表「寒冷曝露時の熱産生反応からみた生理的多型性の検討」(前田享史)
- 2015年度～2018年度, 基盤研究(B), 代表, 「メラトニン分泌抑制を軽減するLED照明の点滅特性」(小崎智照)
- 2016年度～2020年度, 基盤研究(S), 連携研究者, 「人種化のプロセスとメカニズムに関する複合的研究(代表: 竹沢泰子)」(瀬口典子)

#### 企業との共同研究

- 2016年度～2017年度, 株式会社ノーリツ, 「寒冷環境における入浴行為による身体負担と血圧変動及び心理反応について」(前田享史)
- 2016年度, アイシン精機株式会社, 「寒冷域における体表温と生理反応の関係に関する技術指導について」(前田享史)

### アクティブライフ部門

#### 競争的資金

- 2015年度～2016年度, 挑戦的萌芽研究, 代表, 「スピーチを用いた聴性脳幹反応の補聴器フィッティングへの応用に関する研究」(白石君男)
- 2015年度～2017年度, 挑戦的萌芽研究, 代表, 「動作アシストに対する筋のアダプタビリティに関する基礎的研究」(村木里志)
- 2014年度～2016年度, 基盤研究(B), 代表, 「下肢筋プロパーションと歩行モーションの加齢変化と

その関連性」(村木里志)

- 2016年度～2018年度, 挑戦的萌芽研究, 代表, 「高齢者の特性と家庭内転倒リスクを考慮した衣服型ウェアラブル端末の開発と検証」(能登裕子)
- 2013年度～2015年度, 若手研究(B), 代表, 「介助負担と乗り心地を考慮した標準型車いすへの改善に関する検討」(能登裕子)・2014年度～2016年度, 若手研究(B), 代表, 「多次元低周波ストリームデータのパターン認識法の構築」(大草孝介)

### ヒューマニティ部門

#### 競争的資金

- 2015年度～2018年度, 基盤研究(A), 代表, 「子どもの高い光感受性と概日リズムの夜型化・成熟に関する研究」(樋口重和)
- 2016年度～2018年度, 基盤研究(A), 代表, 「高齢者の介護予防コミュニティ形成を支援するオンラインゲームデザイン研究」(松隈浩之)
- 2015年度～2016年度, 若手研究(B), 代表, 「遺伝的な色覚の多様性が感性の個人差に与える影響」(平松千尋)
- 2014年度～2016年度, 基盤研究(B), 代表, 「『わたしたち』の起源: 自己概念の拡張とその心理基盤の発達に関する多角的検討」(橋彌秀和)
- 2015年度～2017年度, 新学術領域研究(研究領域提案型), 分担, 「共感性の個体発生」(橋彌秀和)

#### 企業との共同研究

- 2013年度～2017年度, ファンケル株式会社, 「概日時計に及ぼすL-セリンの影響に関する研究」(樋口重和)
- 2016年度～2017年度, 大日本印刷株式会社, 「有機ELディスプレイを対象とした感性・脳科学的アプローチに関する共同研究」(樋口重和)
- 2016年度, 国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構(JAXA), 「特種作業実施場所における照明環

レジリエンスデザイン部門

競争的資金

- 2016年度, JST RISTEX 受託研究, 代表, 「未来の安心のための災害避難所に関するレジリエンスアシストサービス実装の可能性調査」(綿貫茂喜)
- 2014年度～2016年度, 基盤研究(A), 代表, 「日本人の寒冷適応能を構成する遺伝的要因と生理的要因の検証」(綿貫茂喜)
- 2015年度～2016年度, 挑戦的萌芽研究, 代表, 「セロトニントランスポーター遺伝子のSアレルを有する日本人の生理人類学的特徴」(綿貫茂喜)
- 2015年度～2018年度, 基盤研究(B), 代表, 「子育て支援プロダクト創出のための科学的エビデンスの構築」(藤智亮)
- 2015年度～2017年度, 基盤研究(B), 代表, 「地域救急医療の質の向上に資する科学的証拠の構築に関する研究」(山田クリス孝介)
- 2016年度～2019年度, 基盤研究(C), 代表, 「社会的紛争における暴力誘発装置としての集団: “集団心理”の実証的検討」(縄田健悟)
- 2015年度～2017年度, 基盤研究(C), 分担, 「大規模医療情報基盤を利用した敗血症の治療に関する医療経済学的分析と評価」(山田クリス孝介)
- 2015年度～2016年度, 基盤研究(B), 分担, 「成員間の「暗黙の協調」を促進し全体的連動を創成するチームマネジメントの研究」(縄田健悟)
- 2015年度～2016年度, 九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト, 代表, 「被災地におけるレジリエンスデザイン研究」(尾方義人)
- 2016 - 2017年度, 挑戦的萌芽研究, 代表, 「Thoughtless Resilience とはなにか」(尾方義人)
- 2016年度, 九州大学社会連携事業経費, 代表, 「紙おむつのリサイクルに関する研究」(尾方義人)
- 2016年度, 平成28年NHK番組アーカイブス学術利用トライアル, 代表, 「レジリエンスデザイン学研究的資料としての, 映像の活用方法の研究ー被災地や被災者のレジリエンスデザインへの貢献ー」(尾方義人)
- 2016 - 2017年度, DNP文化振興財団グラフィック文化に関する学術研究助成, 代表, 「レジリエンスデザインとしての避難所における情報伝達とコ

企業との共同研究

- 2015年度～2017年度, 株式会社サムライト, 代表, 「認知機能のレジリエンスに関する基礎的研究」(尾方義人, 藤智亮)
- 2015年度～2016年度, 株式会社アーバンゲット, 代表, 「レジリエンストランスポートーション商品の開発研究」(尾方義人, 藤智亮)
- 2016年度, 佐賀県吉野ケ里町地域おこしグループさざんか塾 受託研究, 代表, 「佐賀県「地方創生」事業に関する教材開発」, (尾方義人)
- 2016年度, 三愛船舶設計, 代表, 「糸島市営船のデザイン」, (尾方義人)
- 2016年度, アトラス化成株式会社, 代表, 「福祉機器のデザイン」, (尾方義人)
- 2016年度, ナノフォトン株式会社, 代表, 「計測機器のデザイン」, (尾方義人)
- 2016年度, 福岡丸本株式会社 受託研究, 代表, 「商品ブランド開発に関する研究」, (尾方義人)

トータルケア

## 応用生理人類学研究センター年報（2016年度）

---

発行日：2017年10月2日

編集発行：九州大学大学院芸術工学研究院附属 応用生理人類学研究センター

〒815-8540 福岡市南区塩原 4-9-1

九州大学大橋キャンパス 応用生理人類学研究センター事務局

E-Mail： [parc@design.kyushu-u.ac.jp](mailto:parc@design.kyushu-u.ac.jp)

URL： <http://www.parc.design.kyushu-u.ac.jp/>



## III 応用生理人類学研究センター

PHYSIOLOGICAL ANTHROPOLOGY RESEARCH CENTER

〒815-8540 福岡市南区塩原 4-9-1 九州大学大学院芸術工学研究院

<http://www.parc.design.kyushu-u.ac.jp/>